



TITLE:

アウグストゥス霊廟と大ストゥーパ - 車輪状構造の由來 -

AUTHOR(S):

桑山, 正進

CITATION:

桑山, 正進. アウグストゥス霊廟と大ストゥーパ - 車輪状構造の由來 -. 東方學報 1998, 70: 506-566

ISSUE DATE:

1998-03-27

URL:

<https://doi.org/10.14989/66791>

RIGHT:

アウグストゥス靈廟と大ストゥーパ

——車輪狀構造の由來——

桑 山 正 進

1. 車輪狀構造をもつストゥーパの遺構
2. 法輪説批判
3. 初期ストゥーパの構造
4. 車輪狀構造の地方差とその意味
5. アウグストゥス靈廟
6. 車輪狀構造導入の積極性
7. 導入の年代と意義

表 1 車輪狀構造をもつ遺構とその細部要素

表 2 法輪の輻の数

插圖目録

参考文献

ストゥーパは、地方によって用材にちがいはあるが、煉瓦、石、土をつかって、下から基壇（圓形あるいは方形）、圓胴部、伏鉢、ハルミカ、傘の順に築いている。そういったストゥーパで發掘を経た例をみると、内部に壁を車輪狀に造ったものがある。車輪が、轂と輻と輪で成るように、ストゥーパのなかにつくられたものも、上からみるとそうみえるので、ここでは車輪狀構造と呼んでおく。すなわち、轂にあたる圓形あるいは正方形の施設がストゥーパの中心にあり、そこから輻壁が放射狀に外輪壁にむかっている。轂と外輪との間に、ひとつかふたつの同心の環狀壁をおいているものもある。この構造は、ストゥーパのいちばん下の、圓形基壇の内部に、一定の高さの壁構造として發見されることが壓倒的に多い。基壇より上の圓筒部を含んだ部分にまでかかることもあったかもしれないが、發掘例ではそれを確かめられない。そんなに高く残った例がないからである。しかし特異な例として伏鉢という高い部分にそれを置いたストゥーパも實は存在する。

こういった車輪狀構造をもつストゥーパは、若干の見落としはあるかもしれないが 40 基たらずが知られている（圖 1）。ただしその中で 22 基は Nagarjunakonda というひとつの場所に集中しているので、それを除くと 16 基がインド＝パキスタンの亞大陸に分布していることになる。とすると、車輪狀構造のストゥーパは、發掘されたストゥーパ全部の

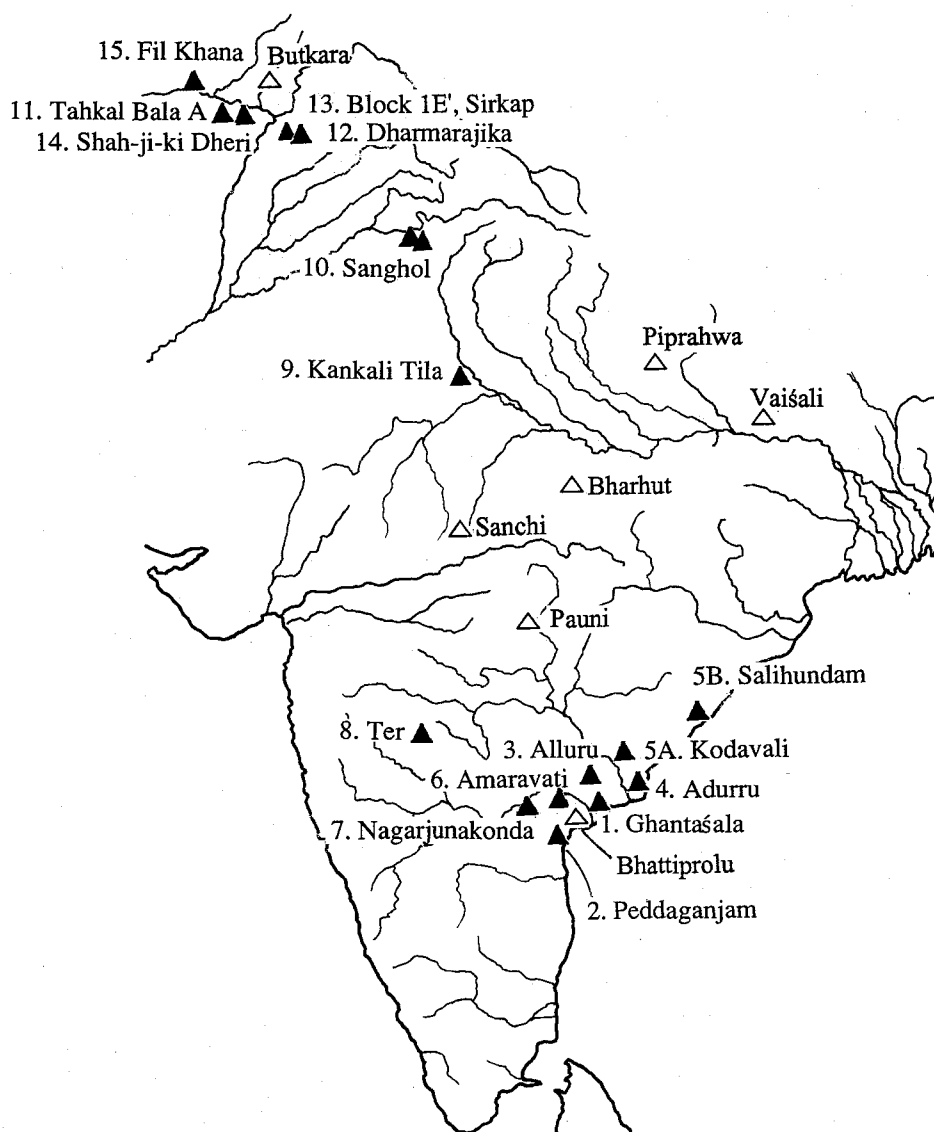


圖1 車輪狀構造をもつストゥーパの分布 (白ぬき三角は車輪狀構造をもたない大ストゥーパ)

數にくらべたら、そんなに多いとはいえない。しかしそれがまったくないものがあるのだから、車輪狀構造を採用したとなると、いかにもそのストゥーパは特徴的である。さらに、この形は建築が終われば内に隠されてしまい、外からはそれがあるとはわからないのであるから、いよいよ不思議である。

そんな點を捉えて、これは「法輪」を模したものであるとか、太陽を象徴しているのだとか、象徵論的な意味をもたせる説明がしばしばおこなわれる。しかし車輪狀構造が高さ

をとまなう壁構造であることを考えると、どうもこの見方だけですべてを説明しているようにはみえない。それならば、車輪状構造とはなんであるのか、なぜそんな構造がストゥーパのなかに採りこまれたのか。どのようにしてこの構造がインドにあらわれたのか。そうしてそれはストゥーパに関してなにをわれわれに知らせようとしているのか。これらの疑問を解くためには、まず、できる限りおのおのの発掘例にあたってその実際を確かめねばならない。そうして見えてくる事實は、法輪説などに象徴されるような、そんな思弁的な問題とは無関係であり、インド内部で発生したものでもなく、圓筒形建築をつくる外來の技術ではないかということである。

1. 車輪状構造をもつストゥーパの遺構

まず以下のように車輪状構造の遺構を観察してゆくが、最初の8箇所は1例をのぞいてみな Andhradeśa に集中している。この分布の偏在性はのちにのべるように車輪状構造の使われた時代を反映している(圖1, 表1)。

(1) *Ghantaśāla* (圖2)

Ghantaśāla は、現 Andhra Pradesh, クリシュナ地方の Masulipatam の西 20 キロにある小邑の名をとってつけられた佛教寺院跡である。プトレミー (VII, 1, 15) は Maisolos 河口を敍したのち、ローマの物産を荷揚げする港町として Kontakossyla を述べる。これは *Ghantaśāla* 出土の大理石欄楯柱の碑文にみえる *Kaṇṭakasola* (Skt. *Kaṇṭakaśāila*) にあたるといふ (Vogel, 1947-48, p. 1)。この佛教寺院跡を発掘した Rea は、巨大なストゥーパの構造について記述している (Rea, 1894, pp. 2-3)。それによると、*Ghantaśāla* は煉瓦造である。煉瓦自身はそれほど焼きがよくない。車輪状構造は、外輪壁が厚さ 6.15 m で、そとづらの直径 33.3 m、そのなかに厚さ 1 m、直径 16.75 m の同心圓壁がある。中心の轂にあたるところは方形に内實に煉瓦をつみ、中心に中空の細いシャフトを残している。轂と同心圓壁との間は、東西南北各 3 本の直交する壁で方格を造っている。分厚い外輪壁と内側の同心圓壁との間には 16 本の輻壁がある。このようにしてつくられた壁の間の空間は黒土でしっかり埋め盡くされている。

ストゥーパの上部構造について Rea は、内部に施されたこのような壁の存在から、數層の構成であったと予測している。もし外輪壁がそのままドーム状に立ち上がっていたのなら、これら内部構造の壁は外壁を補強するためだけのものであったであろう。しかし、6.15 m という外輪壁幅は異様に分厚い。伏鉢がはっきりわかっている例では、外輪壁は普通もっとうすい。したがって、Rea は、ドーム部は外輪壁から立ち上がっていたのではな

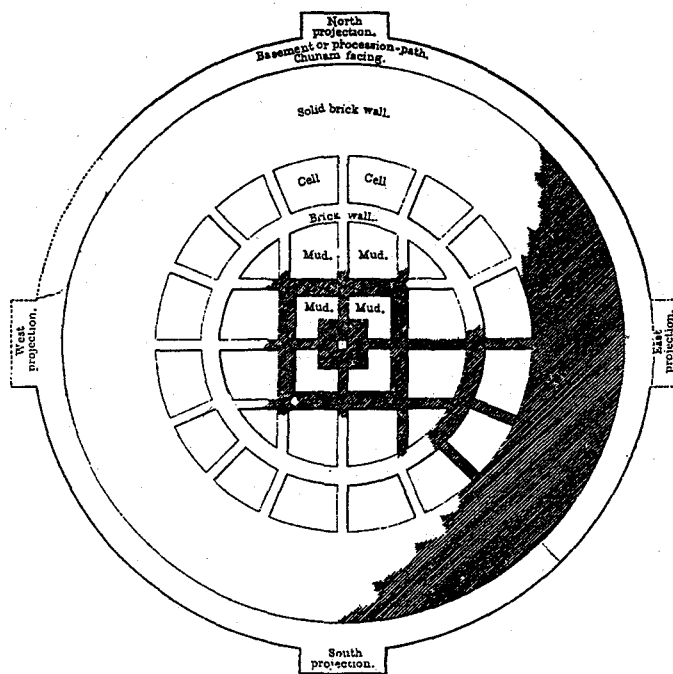
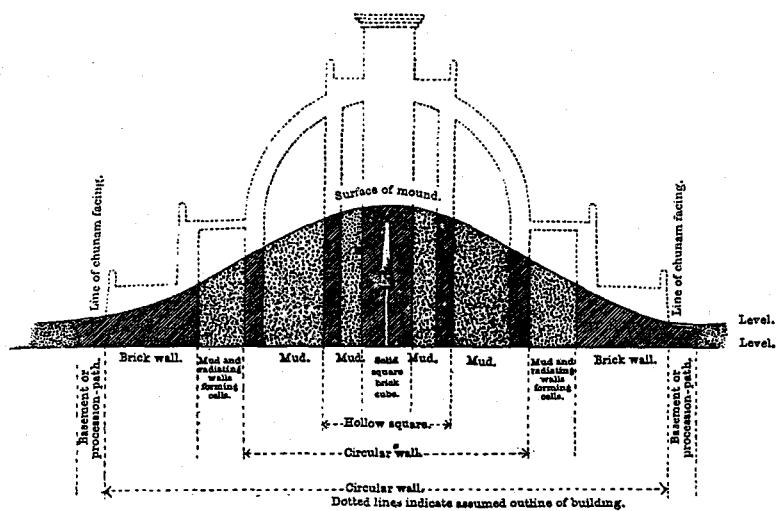


圖 2 Ghantaśāla のストゥーパ平面立面圖

く、同心圓壁の上に立ち上がっていたと推測している。同心圓壁の厚みが伏鉢を立ち上げるのに適当な厚さだと判断したためである。

平面圖と斷面圖に基づいてみると、Rea が考えたこのストゥーパの外形とはつぎのとおりであつたろう。同心圓壁の上に立ち上げられた伏鉢がある。伏鉢は内實ではなく、分割されていて、中心の方形内實の煉瓦積みによって支えられている。16 本の方格の壁と輻壁がこの方形中心部と同心圓壁をしっかりと結合している。分厚い外輪壁、およびこれと同心圓壁とをむすぶ 16 本の輻壁で構成される圓環部分、このふたつの部分を丈が高い圓胴部と Rea は考えている。伏鉢まで内部がこのような壁構造であつたと考える必要はない。このことはのちに明らかになるう。

(2) *Peddaganjam*

Rea はさらに Ghantaśala と同様の構造をもつ Peddaganjam の第二ストゥーパを記録している (Rea, 1894, p. 3)。平面形でみると、煉瓦造りの、ふたつの同心圓壁をもっている。外側の環狀壁は、厚さ 1.15 m を含んで直径が 11.65 m であり、内側の環狀壁は、厚さ 0.9 m をいれて直径 6.45 m ある。兩方の環狀壁は 1.45 m 離れ、その間は放射した 12 本の輻壁が兩者を結んでいる。輻壁のうち 4 本だけが内側の環狀壁から中心にむかって出っ張っている。Rea はストゥーパの内部についてこれ以上のことをいわない。しかし、外輪壁と内側の環狀壁とをとりむすぶ輻壁が 12 本あるストゥーパの場合、内側の環狀壁から中心に向かう輻壁は普通 8 本であり、4 本しかない例はほかにない。ほかの 4 本は既にくずれていたのかもしれない

(3) *Alluru*

Mitra によれば (Mitra, 1971, p. 28), Alluru の煉瓦積みストゥーパは 16 本の輻壁が直径 9.8 m ある轂部から出て、外輪壁に達しているという。圓胴部の直径は 23 m。石灰岩の柱が、ストゥーパ近隣の集落にあるシヴァ寺院境内で發見されている。それには蓮華紋の半圓メダイヨン裝飾と刻文があつた。刻文の文字は 2 世紀という。これを理由に Mitra は Alluru ストゥーパの年代をせいぜい 2 世紀であるとみている。

(4) *Adurru* (圖 3)

東部 Godavari 地方の Adurru でも二重の同心圓壁とそれらをつなぐ輻壁で構成されるストゥーパ構造がある。内輪は、直径 5.3 m の圓形車軸部から出る 16 本の輻壁で分割され、内輪から外輪へは 24 本の輻壁が出ている (IAR 1985-86 A, pp. 1-2, pl. I)。發掘者によると、「外輪は立ち上がって圓胴部をつくり、その上面は約 1 m ひっこんで伏鉢が立ち上がって

いる」。ストゥーパの圓周 64 m, 直徑 20.4m, 殘高3.45 m である。ストゥーパマウンドは全部で5層あったが、下から2層目が煉瓦片を含む土層であり、ストゥーパはこの層の上に基礎をおいた。土器型式とストゥーパ建築型式から、2-3世紀であると、發掘者はいう。

(5) *Kodavali and Salihundam*

東 Godavari 地方のストゥーパ遺跡 Kodavali については輻壁の數、規模についてはつまびらかではない。ただここは煉瓦ではなく、石積みのストゥーパである。Sarkar によると、テラス狀の平坦な場所に立ち、基礎部にあたる車輪狀構造は内實の轂部と二重の同心圓壁とをもっているという (Sarkar, 1960, p. 78)。Salihundam に関しても同様に情報は得られていない。ここではひとつの小塔が、車軸と、8本の輻壁、外輪壁とで構成される車輪狀構造である (Mitra, 1971, p. 222; Margabandhu, 1985, p. 36)。

(6) *Amaravati*

誰も Amaravati の大塔に車輪狀構造があったとはいわない。Barrett (1954) は車輪狀構造にふれながらも復原研究には反映していない。Knox (1992) は Barrett を襲っているだけである。ここはふるくに貯水池造成のためマウンドの内部をおおきく剔りってしまったので、めぼしい遺構はなにもないのであるが、Burgess は、Amaravati 大塔の記述に際して大規模な煉瓦構造に注意している。それはすでに Mackenzie が發見したもので、大塔をとりまく欄楯から約3.6m 内側にあった (Burgess, 1970, p. 20)。Barrett も大塔の復原研究に際してこの煉瓦構造を一應重視している。問題の煉瓦構造は、ストゥーパ南西の内側に、ストゥーパ外縁と同心圓狀に造った環狀壁の一部で、長さ 12 m 測り、幅は 2.4 m, 殘高 4.3 m ある (圖4) (Barrett, 1954, p. 35)。Mackenzie は、ストゥーパの南側にある石を含んだ組み物は多分ストゥーパ内部の壁の一部であろう、とすでに言っている。土採りのときいっしょに取り除いてしまったが、おなじような組み物がストゥーパを一周していたという村人の證言を記録している (Barrett, 1954, p. 35, para. 2)。

これを Burgess はストゥーパのテラス (基壇の上の pradakshinapatha) を受ける基礎構造とみるが、伏鉢がここから直接立ち上がるのか、あるいはまた別のテラスがつくられ、そこから形成されるのかは、明言していない (Burgess, 1970, p. 20)。一方、Barrett はこう考えた。Alluru, Ghantaśala, Nagarunakonda などの大ストゥーパには外縁に分厚い環狀壁があり、その内部はかならず輻壁で補強されている。Amaravati の分厚い壁もこれらと同じ性格のものであり、これは車輪狀構造の外輪の一部であり、伏鉢を立ち上げるための内部の構造であると。また Mitra は伏鉢の内部は内實でないとする點で Barrett を支持

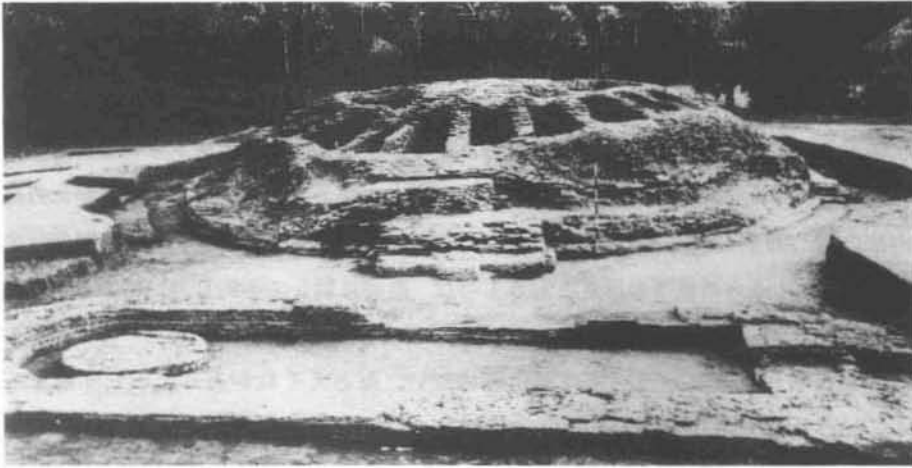


圖3 Adurru のストゥーバ

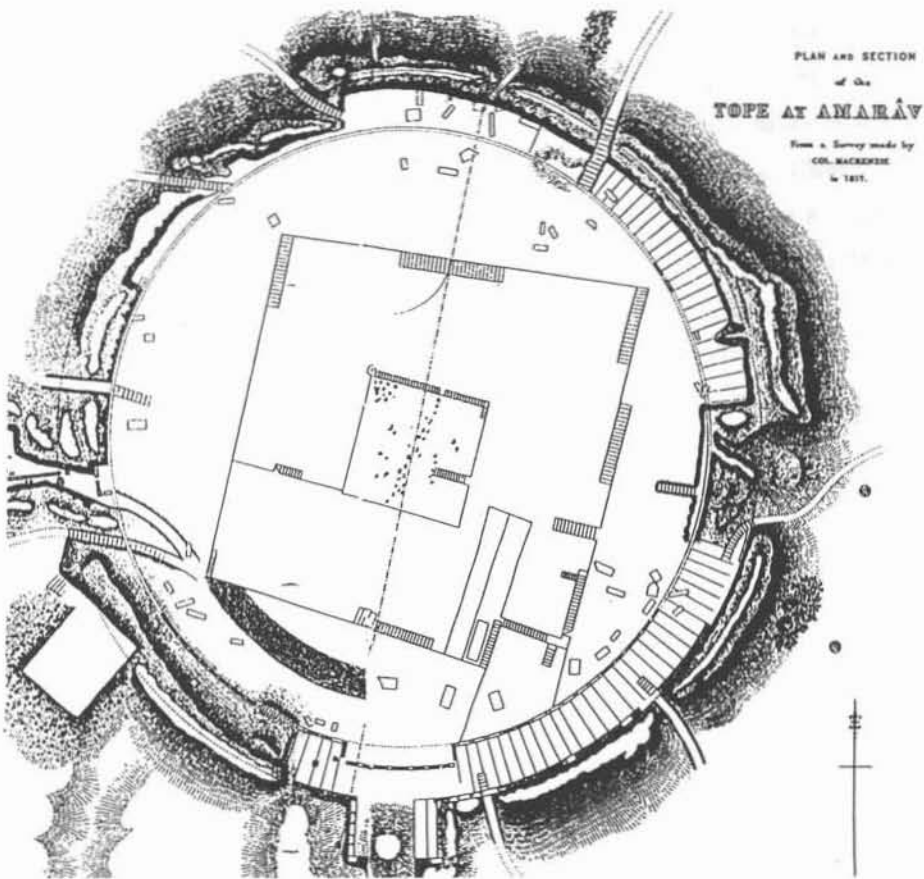


圖4 Mackenzie による Amaravati 大塔平面圖

するが、この分厚い壁が内側を車輪状の輻壁で補強されていたとする点では用心ぶかい (Mitra, 1971, p. 203, n. 11)。しかし Barrett にかわる案を出してはいない。

それなら、このように分厚い、ストゥーパ外輪壁とはなんであったのか。もしこれが車輪状構造の要素にならないとしたら、そのような環状壁は内實の大ストゥーパにも認められる構造であったのかどうか。同心圓壁と輻壁をもつストゥーパでは、あきらかに外輪壁と内部の同心圓壁との厚みの差はおおきい。あるいは同心圓壁がなく、外輪壁だけのストゥーパでも、その外輪壁の厚さというものは、直径に対して不釣り合いにおおきく設定されている。すなわち Nagarjunakonda では、第 7, 20, 22, 38 ストゥーパのように、内實に煉瓦を積んだストゥーパには環状壁はない。たとえそれがあったらしくみえるストゥーパでも環状壁は至って薄い。したがって、Mackenzie が Amaravati でみつけたこの 2.4 m 幅の壁の一部は、輻壁を内部にもつ車輪状構造の外輪壁の一部である可能性が高く、車輪の直径は曲率からみてほしい 41 m を測ったであろうことは疑いない。すくなくとも Andhra 地方において分厚い外輪壁は車輪状構造を持ったストゥーパにはつき物、すなわち車輪状構造の重要な要素のひとつである。

しかしながらこの環状壁が最初のストゥーパの一部であったのか、あるいはのちの段階のストゥーパに属するものであったのか、これはなかなかむずかしい問題である。大量に出土した碑銘によれば、Amaravati が紀元前 3 世紀以降に佛教の重要な一中心であったことははっきりしている。Sircar は刻文のある石柱断片を Aśoka 王柱の破片とみて大塔の内核部分はすでに前 3 世紀には存在したとしている (Sircar, 1963-64, pp. 40-43)。一方、Chandra は同じ刻文に基づいて大塔を前 2 世紀の創建とする (Chandra, 1919-20, p. 261)。しかしストゥーパの内核がそんな時代まで遡るとしても、その時代のストゥーパの規模はずっと小さなものだったはずである。問題の環状壁の直径は 41 m もあり、前 3 世紀のストゥーパにしてはあまりにもおおきすぎる。環状壁が Amaravati 最初の大ストゥーパの一部とはおもえない理由である。

Mitra によれば、最近の発掘によって現存の ayaka は最初のストゥーパよりあきらかにあたらしいものであり、おそらく 2 世紀まで下がると。つまり、南の ayaka の内積みとしてつかわれていた石がふたつあり、ひとつはストゥーパの周囲にたっていた欄楯柱を再利用したもの。どちらにもほぞ孔があり、ほぞ孔のなかに奉納品がはいっていた。その奉納品のことが Burgess の圖版 LX の Inscription 47 にみえ、この刻文は 2 世紀のものであるという。さらに Lüders の示すある刻文 (Lüders, 1973, p. 147, no. 1248) は、Mahacaitya 西門の法輪が Satavahana 朝の Purumavi (AD 130-159) 時代に奉納されたことを記している。すなわち Amaravati の Mahacaitya つまり大塔は、2 世紀の第 II 四半世紀に ayaka と塔門とが施與された。ここに問題としている外輪壁の外側は欄楯と 3.6 m 離れつ

つ、平行に造られている (Burgess, 1970, p. 20)。大塔外回りが造営されつつあったのが2世紀の第II四半世紀ごろであるなら、大塔自身はおそらく1世紀末から2世紀はじめまでには完成していたであろう。そうしてこの大塔は基礎に車輪状構造をもっていたのである。

(7) *Nagarjunakonda*

3-4世紀の年代があたえられている Nagarjunakonda 佛教僧院群のうち、車輪状構造をもつストゥーパは24基ある。計測値など細部についてわかっているのはそのうちわずかに14基である。最大かつ最初のストゥーパは Mahacaitya とよばれた第1ストゥーパである (圖5)。これは Ikshvaku 朝始祖 Chantamula の息にして後継者なる Virapurushadatta の第6年に建設されている (Sarkar, 1960, p. 68, n. 1 ; J. Ph. Vogel, 1929-30, p. 3)。3本の同心圓からなり、外縁の東西南北四方に方形の突出部をもつ。外輪の直径7m。最奥の圓形部のみが内實の輻壁から發する8本の輻壁で構成される。そのほかの同心圓がつくる空間には、16本の輻壁をおいている。

第5ストゥーパは、Virapurushadatta の息である Ehuvala Chantamula の即位第2年の建設、第9ストゥーパは、その第8年に修築された (Sarkar, 1960, p. 69; IAR 1957-58, pp. 8-9)。雙方とも二つの同心圓と8本の輻壁をもち、中心は煉瓦を内實に積んでいる。第5ストゥーパの外輪壁内側の空間は12本の輻壁、第9ストゥーパでは16本である。第5ストゥーパの外輪壁外周の直径は14.7mあり、第9ストゥーパのそれは12.5mある (圖6)。Sarkar がいうように、8m以下の直径をもつストゥーパは、10m以上の直径をもつストゥーパより、輻壁の数が少ない。第30、第32Aストゥーパ(6本)、第14、27、52、54ストゥーパ(4本)はこのことを示している。直径10m以上のストゥーパは中心に8本をもつか、あるいは輻壁から8本が放射している。これらよりもずっと小さいストゥーパでは、環状壁がひとつだけで、同心圓壁を欠くのが普通である。その場合壁幅が厚いことは興味ぶかい。しかし、直径10m以上の大規模ストゥーパでも、第6、第21ストゥーパ(15m)のように、同心圓壁を欠くものがある。

車輪状の基部をもった Nagarjunakonda のストゥーパのほとんどが中心に圓形の輻壁をもち、みな煉瓦で内實につくっている。二三、内實にはつくらず、圓環につくるもの(第14、第52、第54ストゥーパ)、箱形方形につくるもの(第3、第9ストゥーパ)がある。方形の場合、輻壁は方形の四角、ないし一邊の中心から出る。第27とか第108ストゥーパはこういった輻壁がなく、直接中心へむかって輻壁が收斂する。

(8) *Ter*

Maharashtra 州南部の Ter は、*Periplus Maris Erythraei* (Casson, 1989, pp. 83, 211, 213, 292;

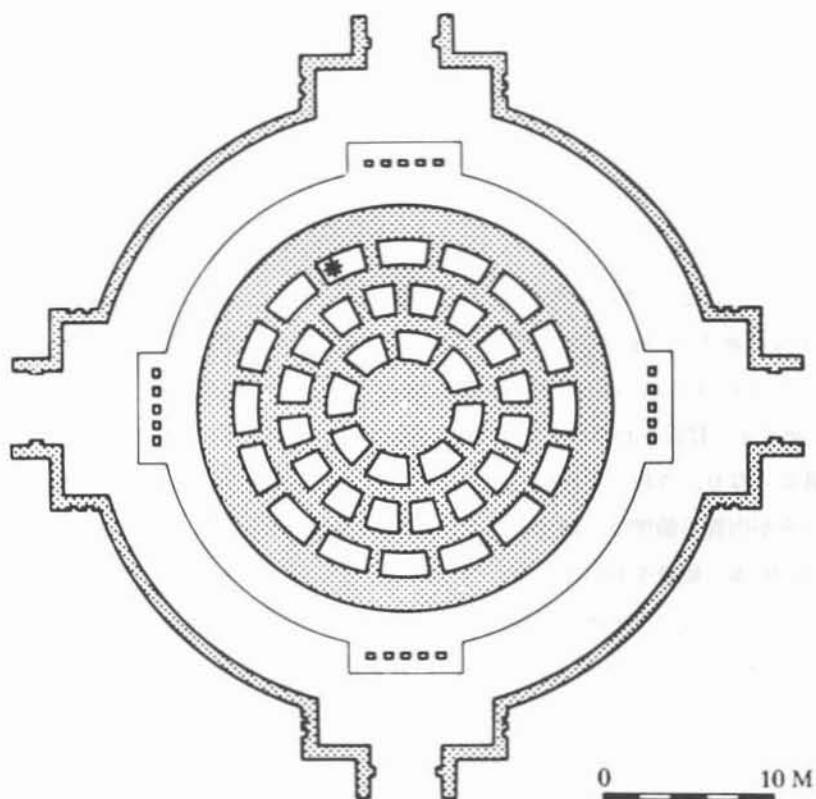


圖5 Nagarjunakonda の第1 ストウパ平面圖



圖6 Nagarjunakonda の第9 ストウパ

『エリュトラ海案内記』第50節：村川, 1946, p. 1015) に記述された Tagara である。綿布の一大集散地として大きな市であった Tagara は、キャンベイ湾内にあった港湾都市 Barygaza に通じる一方、南東へ Krishna 河をくだれば、Amaravati 方面に至る要衝にあった。Ter のストゥーパは最近の発掘で、煉瓦造りの車輪状構造をもち、その基部、つまり車輪状の部分だけがのこっていたことがわかった (IAR 1967-68, p. 25)。直径は 26 m。報告によると、circular ribs of bricks with eight spokes があり、pradakshinapatha があり、四方向に ayakapatha が突出しているという。報告は短く、平面図、寫眞、細かい計測値もないので、circular ribs と記述されたものがどんなものかわかりにくい。報告によれば、石工の名前を記した刻文と Purumavi 王発行の貨幣とから、ストゥーパの年代は 2 世紀前半であるという。方形の前堂を木材で架構した跡のある前方後圓平面のストゥーパ祠堂が大ストゥーパのそばにあり、それは 3 回修復され、Purumavi 王の貨幣がここでも出土した。この佛教寺院の年代を正確に求めるについては最終報告をまつしかないが、ローマ貨幣の土製倣製品や地中海型式のガラス瓶が出土していることは注目すべきである。

遺跡は M. N. Deshpande が発掘の 15 年前に発見し、その際、ストゥーパ丘附近の畑や、Ter の町をはさんでストゥーパと反対側にある邑のヒンドゥー寺祠のそばなどから彫刻のある石灰岩板石 5 枚を発見している。ストゥーパ丘附近の畑ではさらに 3 枚がその昔 Fleet によって発見されている (IAR 1961-62, p. 102, pls CXLIX, CL)。これら石灰岩の彫刻が Amaravati 派の系統にあることを Mitra (1971, p. 151) は認めている。なお Tagara-Ter に関しては Cimino (1994, pp. 175-181) に Deshpande の最近の短報と文献がある。

以上の諸例はほとんどが半島部インドであるが、車輪状構造を容れたストゥーパは Maharashtra から北に、Vindhya 山脈をこえても知られている。それはみな Mathura より北西に限られる。Mathura の Kankali Tila, Sanghol, Taxila の Dhar-marajika 大塔と Sirkap の 1 基、Peshawar の Tahkal Bala と Shah-ji-ki Dheri, それに Jalalabad の Fil Khana である。以下にそれらを検討するが、この分布もまた半島部とおなじように、そこで車輪状構造がつかわれた時期は限定されている。

(9) *Kankali Tila* (圖 7)

この Jaina のストゥーパについて得られる情報は V. Smith (1969, pls. II-III) の解説文と簡単な平面図だけである。平面図によれば、8 本の輻壁がみとめられる。そのいくつかが環状壁をこえて外側に突き出ている。そうすると、突き出た壁は外輪の外側をささえる扶壁かといえば、そうではあるまい。ストゥーパの圓形基壇の外側に扶壁がある例はないからである。平面図をよくみると、これら扶壁様の壁のうち北へのびる一本の壁が、それと

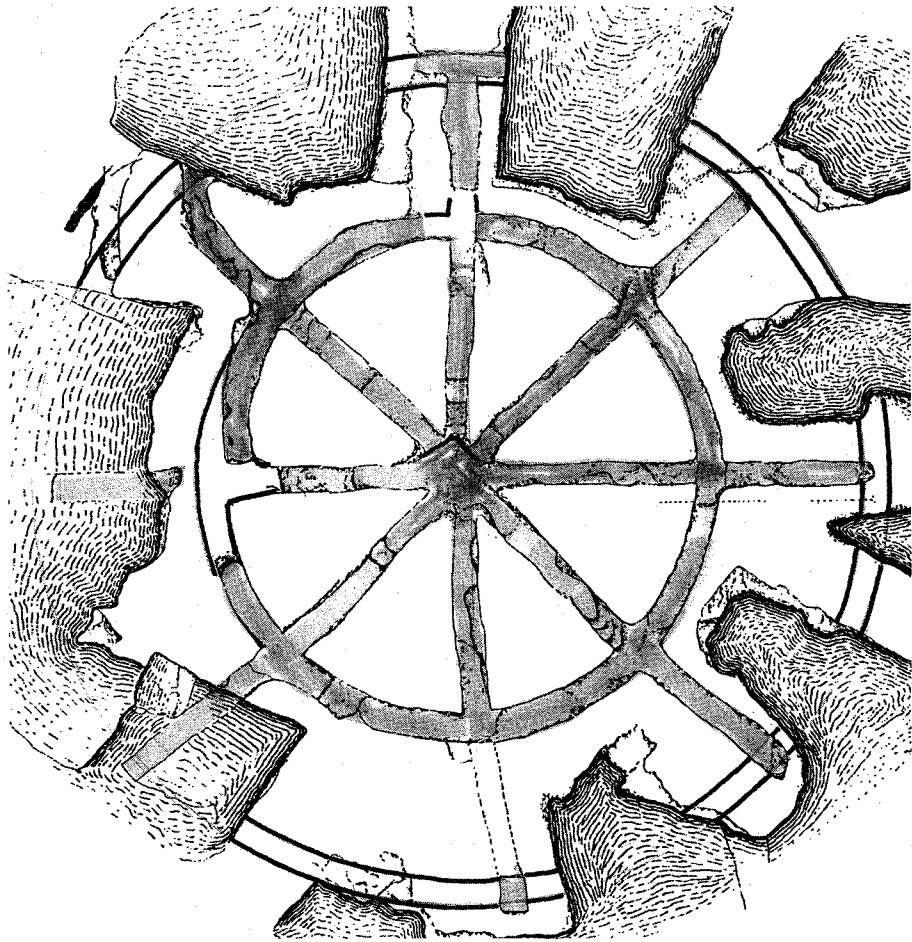


圖7 Kankali Tila のストゥーパ平面圖

直交する壁に突き当たっている。直交する壁とは、つまり外輪壁である。したがって Kankali Tila のストゥーパの下部構造は、ふたつの、中心を同じくする環状壁と、8本の輻壁からなる車輪状構造である。しかし、不思議なのは、南部の諸例でふつうにみられる轂相當の設備がここではなく、輻壁は中心に向かって収斂するように造られている点であり、車輪という形を正確に言えばとっていない。南部、たとえば Nagarjunakonda では、直径のきわめて小さい、第27とか第108ストゥーパ(4.5m)でも轂の壁構造はかならずある。Smithの平面圖の縮尺にしたがって測ると、Kankali Tilaは直径が19mというおおきな規模である。南部ではそんなにおおきなものなら當然あったはずであるが、ここにはないのである。不幸にも19世紀、20世紀初頭の發掘は美術優品の探索に熱心であり、ストゥーパの遺構自體の研究はおろそかであり、直接年代の決め手になるようなものをみなこわしてしまった。いま年代に辛うじて結びつくものといえ、ストゥーパのまわりで出

土した、マトゥラー石の彫刻しかない。すなわち 11 年銘のある Karttikeya 立像、35 年銘のある Tirthankara 立像を彫った柱、しゃがんだ Surya 像。みな Kushan 時代だという程度のことはかわからない代物である (Huntington, 1985, pp. 160-62)。ただし Sanghol 第 1 ストゥーパ出土のマトゥラー彫刻との類似を S. P. Gupta (1985, p. 50) は主張している。Sanghol はやはり車輪状構造をもったストゥーパであり、以下にこれについてのべる。

(10) Sanghol (圖 8-圖 10)

Ludiana と Chandigarh の間にある Sanghol は、SGL-5 と SGL-11 の発掘区で煉瓦積みみの佛塔が都合 3 基出土した。それぞれ第 1, 第 2, 第 3 ストゥーパと名づけられた。第 1 ストゥーパの脇、表土を取り除いたところに、解体された欄楯が一括埋藏してあった。これによって Sanghol の名が知られた。ストゥーパ自身に関する報告はインド考古局年次報告の域を出ず、情報はすくない。

第 1 ストゥーパは、車輪状平面の圓筒形とそれを取り囲んだ方格とでつくる構造である (圖 8)。輻部として中心には、ややおおきい、中空の圓筒 (外径 3.24 m) をつくり、そこから 12 本の輻壁が出て、第一の同心環状壁 (外径 5.04 m) と結合している。Gupta (1985, p. 50) の平面圖で測ると直径 7 m ある。この環状壁の外側には分厚い、第二の同心環状壁 (外径 13 m; 厚さ 1.07 m) があり (圖 9)、これらを 24 本 (残ったのは 20 本) の輻壁がむすんでいる。分厚い環状壁の外側へはさらに 32 本の輻壁が出て、第三の同心環状壁 (外径 16.3-16.8 m) に達している。この壁がもっとも外側の同心圓壁であるが、不思議なことに、厚さはわずか 30 cm しかなく、最もちいさい。輻壁のうち残りのよいもので、高さ 1.18 m である。輻壁と環状壁でつくる空間は土で充填してあった。

このストゥーパが特異であるのは、これら全部が形成するひとつの圓筒形が、一邊 17 m の方形の壁の内側にすっぽりと入れこになっていることである (IAR 1971-72, p. 39)。方形の各邊は、その外側に不規則に方格を壁でしきった複雑な構造をつくり、その最も外側に階段状のものが一段ついていたようにみえる。第 2 回目の報告では、遺構全體が自然層のうえにのっていたとする (IAR 1972-73, p. 28)。ただし第 1 回報告は、ストゥーパ建設前の層として一層あり、黒灰色粗陶を包含する堆積層である。この灰陶は NBP (北方黒色磨研土器) と普通伴出する形式だという (IAR 1971-72, p. 39)。輻部からは灰、炭、齒 (1 本) や骨片とともに灰色の滑石製舍利容器の底部と蓋が出土している。蓋に Kharoshti 銘 Upasa-kasa Ayabhadrasa が認められている (IAR 1984-85, pp. 62, 66)。

第 2 ストゥーパは第 1 ストゥーパよりずっとちいさい (圖 10)。インド考古局の年次報告は、二つの同心圓壁 (それぞれ外径 1.445 m と 3.70 m) と 8 本の輻壁をもつ小規模のストゥーパだというだけである (IAR 1985-86 B, p. 69)。しかし附屬の寫眞でみると、ストゥーパ全

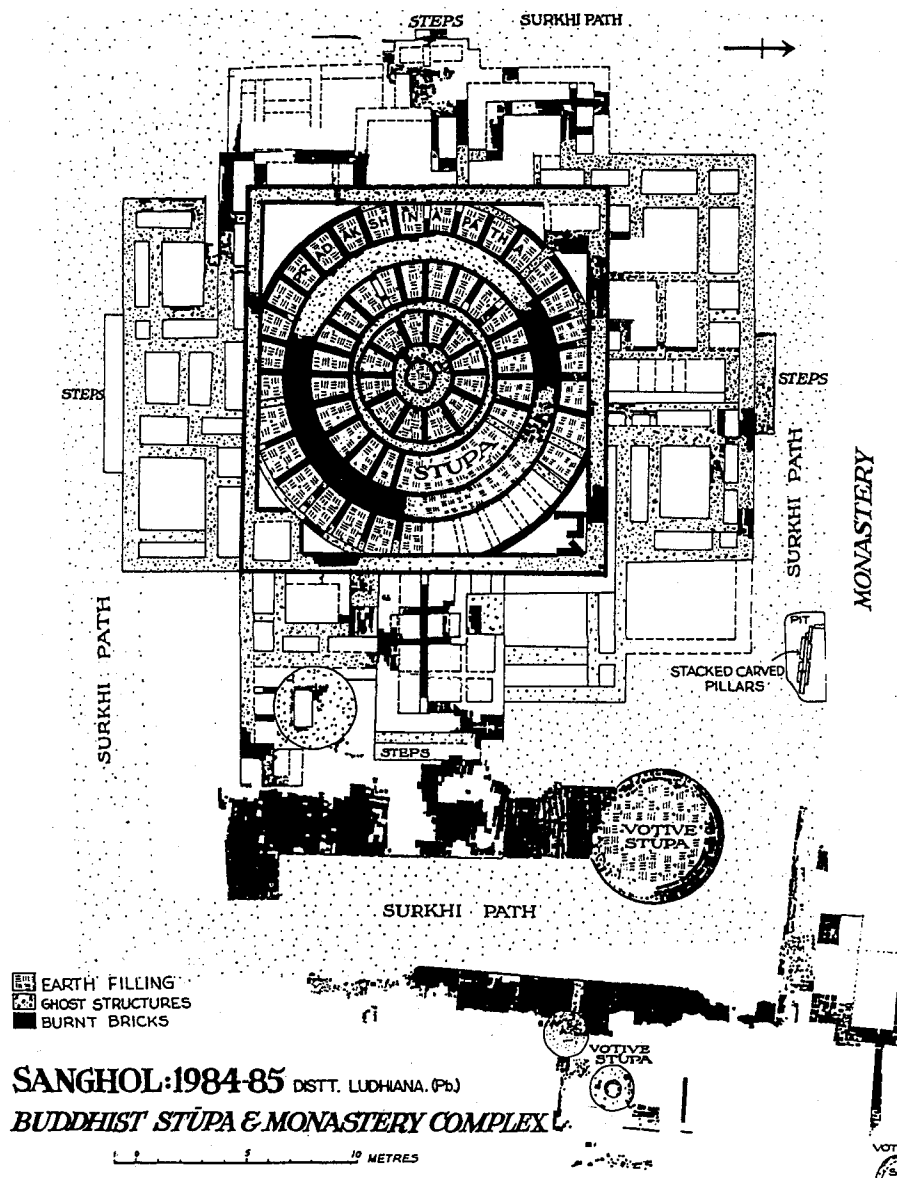


圖8 Sanghol 第1 ストウパー區平面圖



圖9 Sanghol 第1ストゥーバ南西部の遺構

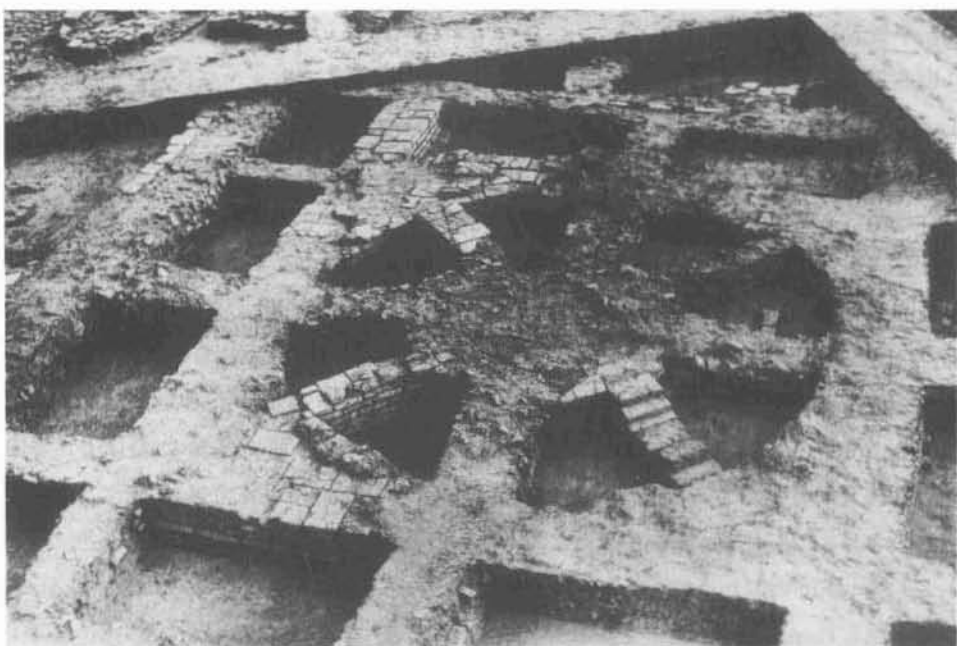


圖10 Sanghol 第2ストゥーバ

體は方形で、方形の内部を圓形につくり、この圓の中心におおきな内實の轂部があり、輻壁が8本支えている恰好である。方形の各遍の外側には細い長方形をつくる點、第1ストゥーパに似ている。しかし、ここでは各方形と車輪形とは相方が對應する形で整頓されている (IAR 1985-86 B, pl. 23)。この寫眞が發掘の最終段階で撮ったものなら、ストゥーパは方形のテラス上に建てられたといつてよい。

遺構を1995年11月に直接調べる機會があった。程度の低い過度の補修が施されていて、發掘當初の姿を考へることがたいへんむずかしい。とくに第2ストゥーパは復元的補修であり、報告の寫眞と結びつけて考へることさえむずかしくしている。報告の寫眞では、圓筒部は立ち上がっていない。方形部とともにきれいに削平されている。元の圓筒の高さはわからないはずである。このストゥーパの外観を、方形基壇のうえに圓筒部が乗っていたような恰好だったとすると、方形基壇のもとの高さもわからなかったはずである。修復された遺構では、削平されたレベルからさらに煉瓦を最高6段積んで、40 cm ほどの高さにしてしまっている。そのためこの高さが方形基壇のもとの高さのような錯覺をあえる。こういった點を考慮して發掘された當時の計測値を遺構にそってかんがえると、方形の一辺はだいたい8 m (北邊は8.06 m)、中心の轂の外徑は1.5 m (轂部は内實ではなく、寫眞が撮影されたあとで中空であることが確認された。内徑は0.34 m)、輻壁の幅0.54 m、長さ0.79 m、外輪の内徑が4.63 m、方形部の殘高が0.44 m である。ストゥーパ全體から受ける印象は、華奢である。

圓形を方形のなかにおくやり方は第1ストゥーパと第2ストゥーパに共通している。Taxila の Sirkap 第Ⅱ層期の Block 1 E' のストゥーパは、内部は圓形でなく方形であるけれども、Sanghol と類似の形式である (Marshall, 1951, p. 183)。これについては後述する。年代に關わる遺物としては、(1)多くの印章と封泥で、Brahmi文字のものが多く、Kharoshthi文字のものはすくない。(2)片岩製錢范。(3)Indo-Parthian, Kushan, Huna の貨幣多數。(4)Taxila 出土品と酷似した象牙製の櫛。Marshall (1951, Plate 199) は Nos. 18, 19, 21, 22, 23 の5點をあげているが、どれに當たるのかわからない。(5)もっとも重要なのはKushan の晩期の椀形土器の内側に墨書された銘文であり、字體は2-3世紀である。

Sanghol で一括埋藏してあった欄楯部品は全部で117點の多數にのぼり、みなMathura 派の彫刻である。欄楯をMathura でつくってSanghol まで運び、そこで組み立てたのである。Mathura 彫刻を大量に運んだものとしては、ここがいまのところ西の果である。Sanghol のふたつのストゥーパの外形は、方形基壇に圓筒部が乗った形である。方形基台ならGandhara でお定まりのストゥーパの形態である。Sanghol がMathura からGandhara へと通じる街道上にあることがおもいだされる。Mathura のKankali Tila はJaina のストゥーパといわれ、こことおなじように車輪狀の構造をもったものであり、か

つ S. P. Gupta が指摘するように、これら欄楯の柱のおおきさや作風もまたきわめて Kan-kali Tila 出土品に近い。それは中インドの Bhuteśvara のものより低く、彫り出しも高くないらしい。Sanghol のストゥーパ自身には年代を知る手がかりがないけれども、Kan-kali Tila と比較できるから、1-2 世紀といった、Kushan 時代にあてることも無理ではない。Gupta はとくに年代について章をさいていないが、Sanghol の報告冊子の表紙には「1 世紀」と書いている。

Sanghol 発掘の最後の年次報告では第 2 ストゥーパと同じ地区である SLG-11 で第 3 のストゥーパが、地面まで削平された状態で出土したことを記している。報告の寫真からみると、すくなくともふたつの同心圓壁があり、中心の轂部からいくつかの輻壁が放射している。方格のなかに圓筒が入れこになった型式ではない (IAR 1989-90, pp. 91, 93, pl. xxvii, b)。

(11) *Tahkal Bala* (圖 11)

前世紀に A. Cunningham と同世代の P. Haslett は Tahkal 遺跡を発掘し、Foucher はその報告 (Haslett, 1876, pp. 238-9) に據って車輪狀構造を説明した (Foucher, 1905, p. 88)。Errington は潰滅状態の遺跡を近年現地に探索し、あわせて Haslett 報告を再検討してこの遺跡にあらたな光をあてている (Errington, 1987, pp. 320-23)。

Haslett によれば、Tahkal Bala にはふたつのストゥーパがあり、A 地区の Mound A がつぎのような構造をもったストゥーパであった。車輪狀構造といっても同心の環狀壁ではなく、正十六稜壁である。どちらも全體の構造を堅固にするための壁で、壁からは石が突出し地面にアリボソのように咬みこんでいる。壁間は石で充填している。内側の稜壁で圍まれた空間は、中心から外へむかってさし渡すように十字形に壁を築き、壁間は泥土と丸石で水平層狀に詰めこみ、十字形の壁と丸石層ははっきりと區別できる。マウンドを掘りさげると、蹴込みと段幅がともに 20 cm の階段狀につくった壁をひとつみつけた。これが一體なんなのかははっきりしないが、ストゥーパの外輪壁ではなさそうである。とすると、外輪壁はその一部たりとも發見できなかったのである。以上を Errington は、Haslett の報告によって、直徑 105 ft (31.5 m) のストゥーパの内部を記録したものと解釋している (Errington, 1987, pp. 314, 321)。

Mound A の平面圖 (Haslett Sketch no. 3 ; Errington, 1987, pp. 308-9, fig. 4) には中心を共有するふたつの十六角形が載っているが、壁の厚さや輻壁のありさまは描いてない。Haslett の記述や Errington の解釋によると、轂部としての構造は存在しなかったようである。Fil Khana, Shah-ji-ki Dheri, Kankali Tila とおなじである。平面が八角形のストゥーパはちょっと考えただけでも Takht-e Bahi, Hadda の Tapa-e Kalan, Kapisa の

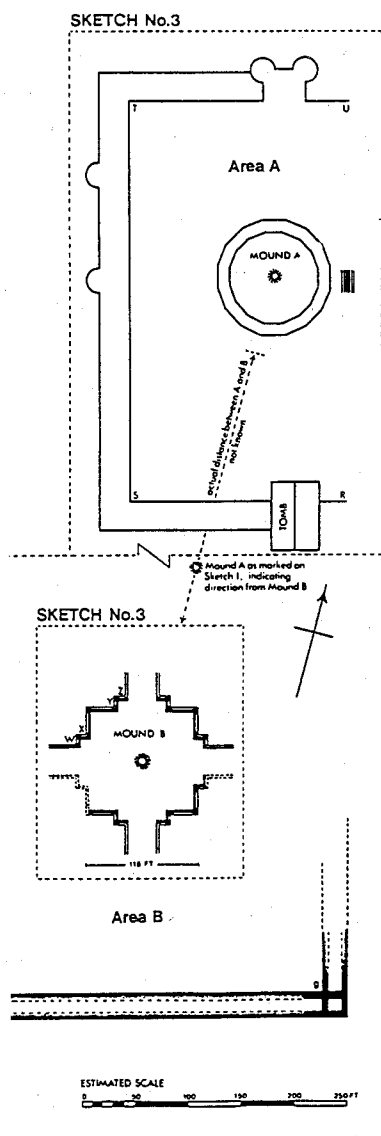


圖 11 Tahkal Bala のストゥーパ平面圖

ではもっとも新しい時期に改築された塔院の東端についたもの、僧坊とおもわれる地区の南外縁についたものがある (Kuwayama, 1991, pp. 103-7, fig. 10)。Gul Dara の方形の僧坊も圓形稜堡でまもられている (Kuwayama, 1991, fig. 9)。Tepe Maranjan 寺院跡でも方形の建物があらたにすくなくとも 3 つ圓形稜堡をつけて第Ⅲ期にあらわれる (Kuwayama, 1991, pp. 100-3, fig. 8)。Shah-ji-ki Dheri でも第Ⅲ期に圍壁が認められ、半圓形稜堡がついている。Taxila の Sirsukh は市壁に半圓形稜堡がついているが、以上の例とは形式が異なっている。Taxila の圓形稜堡の年代については異論がおおいが (Schlumberger/Le Berre,

Shotorak (Kuwayama, 1991, p. 103 ff., fig. 10), Ghazni の Tapa Sardar (Kuwayama, 1991, p. 95 ff., fig. 7) にあり、みな小ストゥーパばかりで、年代もそんなに古くは見積もれず、せいぜい早くて 7 世紀である。十六角形の大ストゥーパなど、このあたりの歴史の文脈では聞いたことがない。だから、十六角形の壁は内部の構造壁であって、外側に本當の外輪壁があったのかもしれない。可能性は否定できない。ただ十六角形の差し渡しでも 32 m に近い、規模の大きいストゥーパとなると、56 m と 72 m の間にある Shah-ji-ki Dheri の第 1 期の圓形ストゥーパ (Kuwayama, 1997, pp. 20-26), 34.5 m の Taxila の Dharmarajika の Main Stupa, 33.3 m の Ghantaśāla, 41.4 m の Amaravati に比肩される。

Tahkal のストゥーパは長方形の壁に囲まれている。圓形や半圓形の稜堡が圍壁についているが、ストゥーパと圍壁とが同時期かどうか、それを検証する手がかりが Haslett の報告のなかには與えられていない。Hadda の Bagh Gai (Barthoux, 1933, p. 144) は、塔院と僧院とが僧坊の壁ひとつを隔てて南北につながった、長方形の建物である。圓形ないし半圓形稜堡はこの建物の四隅と僧院の入口にひとつづいていて、Kapisa の Shotorak

1964, p. 88, n. 6 ; Fussman, 1974, pp. 91-2), これを除くとほかの例はみなだいたい時代のさ
がったものであり、年代は7-8世紀である。大體八角形のストゥーパといった型式があ
たらしいものであることからみると、十六角形もそれほど古くさかのぼるものではない。
ストゥーパの圍壁に附いた稜堡の年代を上諸例を参考にしてかんがえてみると、
Tahkal Bala は1, 2世紀などのストゥーパではなく、ずっとあたらしい可能性がある。

(12) *Dharmarajika* (圖 12)

Dharmarajika の車輪狀構造は輻壁が大きな轂壁に集まるだけの型式であり、外輪壁がな
い。またここでは基礎に置かれたのではなく、圓形基壇のう上に築かれている。圓筒部か
ら伏鉢にいたる、ストゥーパ上部の内部構造である。Marshall によれば輻壁は rough
rubble masonry (粗い亂石積) で、もと16本からなり、それぞれの幅は一定でなく、95-
143 cm を測る。「これらの構造壁は、ストゥーパの基礎の方へ下がっていかず、基壇上面
(berm) よりちょっと上で止まっているから、ストゥーパがいちど荒廢したあとでおこな
われた、後代の修復であることはあきらかである」(Marshall, 1912-13, p. 10)。

Marshall の記述と平面圖によれば、ストゥーパの轂部は内實の圓胴形であり、石積法
は輻壁とおなじ粗い亂石積である。直径は15 m。ストゥーパの直径は基壇部が約39 m,
その上にのった胴部が34.5 m であるから、これらにくらべてもそれはあまりにもおおき
く、類例がない轂壁である。輻壁で残っているのは13本。北側の6本は中心から規則的に
放出するが、そのほかは轂壁から反時計廻りで渦巻き狀に出ていて、全體に不規則にみえ
る。伏鉢を充分含みうるストゥーパの高い位置にこのような構造が施されることは、いま
のべた輻壁や轂壁のありかたをさしひいても、なお南インドの Andhra 地方の例のなか
にはみいだすことができない、かわった車輪狀構造である。

(13) *Sirkap* の Block 1E' (圖 13)

タキシラの *Sirkap* の第Ⅱ層時代の市街に大路にそってつくられたストゥーパである
(Marshall, 1951, p. 183, pl. 24)。このストゥーパについては、東西10.8 m, 南北12 m の方形
で、丈の高い基壇がのこっているだけである。壁面の石積みは一部が古い時代からずと
つかわれていた亂石積み (rubble masonry) で、大部分が diaper 積み (後述) である。内部
は各邊の中心をむすんで菱形に壁をつくり、その中をまた十字に壁でしきり、8本の壁の
間は碎石と土泥でかためている。この基壇は圓形ではなく、方形であり、内部も方形につ
くっているが、構造上は Sanghol no. 2 のストゥーパの基壇と同じである。Marshall は
Dharmarajika の車輪狀構造と比較できるものとして、*Sirkap* の Block 1C' のストゥー
パの基礎構造をあげているが、Block 1C' にストゥーパはないので、このストゥーパのあ

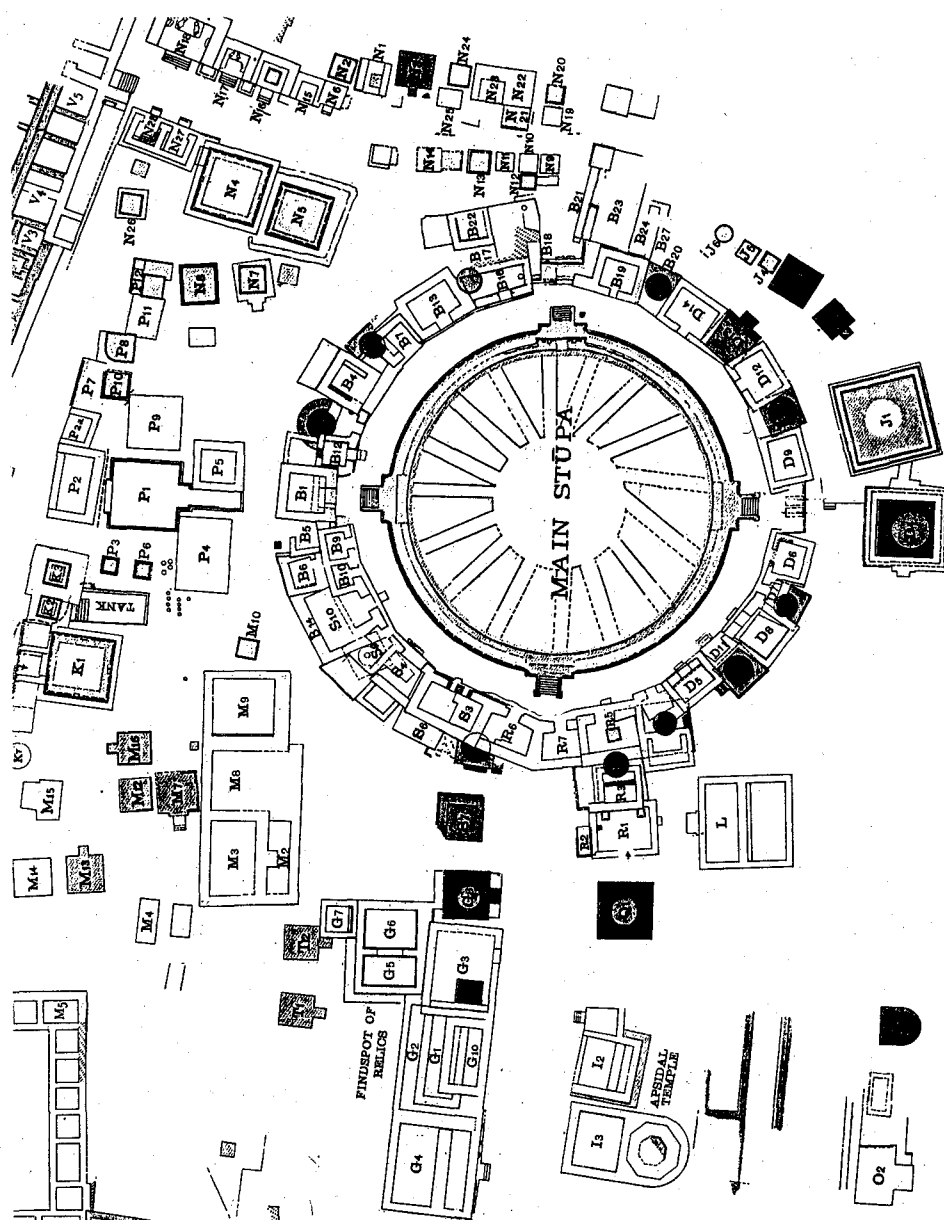


圖 12 Dharmarajika 大塔とその周囲の建築群

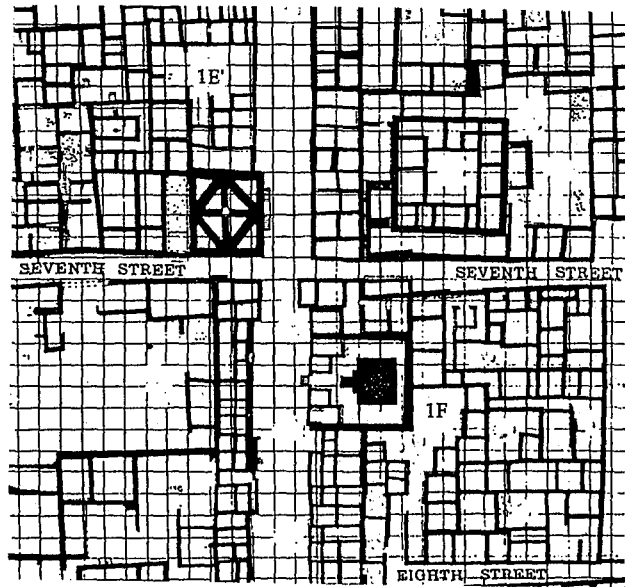


図13 SirkapのBlock 1E'と1Fにあるストゥーパ

やまりであろう。

(14) *Shah-ji-ki Dheri* (図14)

*Shah-ji-ki Dheri*の主塔は、はじめ圓形、つぎに方形、最後に十字形となり、3時期にわたって外観をおおきく變えつつ展開した(桑山, 1995, pp. 408-331; Kuwayama, 1997)。車輪狀構造がつかわれたのは最初の圓形ストゥーパで、Kanishka I世以前である。なんどもおなじことを繰り返したくないが、車輪狀構造に関してはしかたがないので、以下にふれておく。

SpoonerやHargreavesの平面圖だけから判斷すると、4本は輻壁が残っていた。どれも完全なものではなく、いちどは毀されたことを示している。中心から北西と西に出る隣り合ったふたつの輻壁がある。これは中心部だけが残っている。もうひとつは南東へのびるものと南西へのびるものであるが、前者は中心部が損壞していて、途中だけが少々残っているにすぎず、後者はほとんどがなくなっていて、ストゥーパの周縁に至るところで若干残っているにすぎない。

遺跡の中心にひらいた7.2 m平方の試掘坑では、地表から30-60 cmのところでは分厚い輻壁の遺構があらわれた(Spooner, 1908-9, pp. 48-9)。「この壁を避けつつ掘りさげ、ストゥーパ周囲の煉瓦敷きの床面より60 cmほど下のレベルで、舍利室がみつかった。その位置は中心から外れ、輻壁のうちで、東へ走る輻壁の端にもたせてつくられていた。」しか

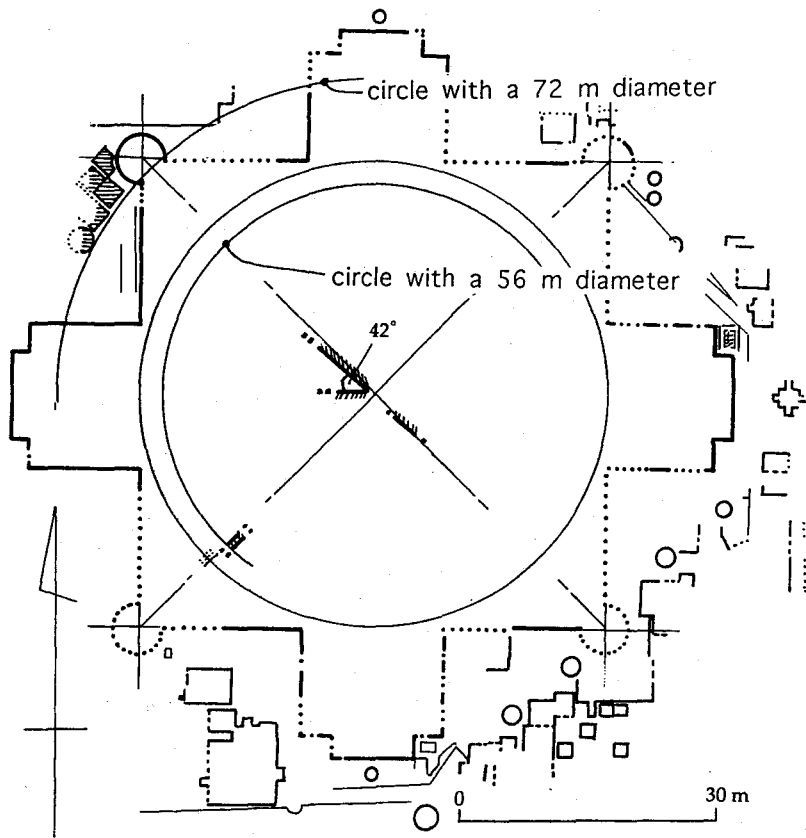


圖 14 Shah-ji-ki Dheri 大塔平面圖

し東へ走る幅壁は平面圖には描かれていない。この記述からすると、發掘當時は在ったにちがいない。

平面圖になく、記述だけからわかる、もうひとつの幅壁は、舍利室とかかわってでてくる。Spoooner は舍利室を掘り當てたときをつぎのように書いている。「數日掘ってから處女層らしきものに達し、そこをあれこれ調べて、埋納物發見の望みはないとおもっていた矢先、なんの前觸れもなしに急にその遺構に出くわした」と。この記述から、舍利室は「處女層らしきもの」の上にあった。

「南北方向に一枚の長く平らなスレートの板石が敷かれていた。その南邊には重たい板石が一枚置かれ、これと直角にもう一枚重い板石が西邊に置かれていた。これら二枚はひとつの方形の 2 邊であり、その南西隅を形成していた。しかし、東側と北側に相應する板石についてはなにも發見できなかった。」これら全體がおかれていた状況からして、舍利室の北側と東側は板石で圍わず、東へ走る幅壁と北東へ走る幅壁のがっちりした石組みが

板石の代りをしていただけ、発掘者はかんがえた。ここに、北東へ走る輻壁が登場するのであるが、ほんとうに残っていたのか、Spooner の単なる想像なのか、報告の記述はあいまいである。

Spooner の記述は、舍利室の発見地점에關して、非常に多くの疑問を生む。第一に、舍利室の東の壁となっていたという「東に走る輻壁」である。7 m 平方のトレンチの中に出土した輻壁のうち、北西と西へ走るものが描けて、東への壁だけ描けない、というのは理解しがたい。第二に、東と北東へ走るふたつの隣り合う輻壁が、方形室の北壁と東壁をつくる点である。これはまったく理解できない。第三に、のちに Hargreaves がストゥーパの圓胴部の周縁を確かめるために、北西に走る輻壁を追いかけたが、そのときの記述として、この壁を「舍利容器が発見された場所から走る」としている点である (Hargreaves, 1910-11, p. 25)。「東に走る輻壁にもたせかけて造られていた」舍利室から、もうひとつ北西に輻壁が走っていたことになり、なんだかさっぱりわからない。舍利容器の発見地点の特定はむずかしい。しかし、かれらの記述から判断すると、輻壁の数だけは 8 本であつたろう。このことについては下の概要に述べるとおりである。

(1) 圓形ストゥーパの最大限のおおきさは、北西部の小ストゥーパ群の内側に沿った圓弧によって復原しうる圓よりかなり小さい。この圓の直径は 72 m である。小ストゥーパ列の内側に、ある程度の幅の繞道の存在を想定すると、この形のストゥーパは直径 70 m はこえなかったであろう。もうひとつ直径を予想させる手がかりは南西部の斷裂した放射壁の末端、南西放射壁の殘存部分の外側の端は、現在殘るすべての放射壁のもっとも外側である。この末端を通り、放射壁の轂にあたる中心をだいたい定めて圓を描くと、直径は 56 m ほどになる。圓形主塔基部の直径は 56 m より大きく、70 m より小さく、南アジア亞大陸中、最大規模のストゥーパであつたことになる。

(2) 輻壁は地山上に建設された堅固な石積みで、平面圖だけみると、北西、西、南西、南東へ向かう 4 本があるが、Spooner と Hargreaves の記述を讀むと、さらに北東と東とへのびる 2 本がこれに加わるから、6 本の放射壁が實際に發掘であつたと考えてよい。しかし Spooner や Hargreaves がつかった「北東」「東」「南西」「西」「北西」という方向指示語から推測すると、北、南、南西に向かう 3 本ももとはあつたであろう。全部で 8 本の放射線を等角度で描くと、45 度でそれぞれ開く。北西へ走る輻壁と西へ走る輻壁がつくる角度は、平面圖において計測すると 42 度くらいである。

8 本の輻壁は確實にあつた。

輻壁の正確な殘高は不明である。舍利室を寄せかけてつくっていた放射壁はすくな

くとも 2 m はあった(桑山, 1995, p. 399)。Sanghol の放射壁の残存状態をみると、部分的にきわめて高く残っているものもあれば、ずいぶん下までなくなっているものもあり、その残高は一定していない。壁の幅(厚み)も報告されていない。しかし南西の輻壁の幅を図上で計測するとだいたい 1.2 m ほどである。

(3) 轂部：北西と西とに走る輻壁が隣りあって平面図に描かれている。隣りあう壁のありかたをみると、轂構造はありえない。

(4) 外輪壁：確認できていない。基礎に車輪構造をおいたのであるから外輪壁はあったはずである。

(15) *Fil Khana* (圖 15)

車輪状構造をもったストゥーパとして、あまり注目されていないのがこの *Fil Khana* ストゥーパで、Jalalabad から北西へ数キロ、東流する Kabul 河の左岸、礫岩台地の上に建っている。マウンドがふたつあり、どちらも倒壊したストゥーパである。河の方を向いた崖に掘り出された石窟寺院と関わるものであろう。ひとつは既に単なる石の堆積、もうひとつは 1962 年に調査したときには車輪状構造が観察できる状態にあり、Simpson のスケッチでは圓胴部の上部に尖頭アーチの列龕帯が残っていた。ストッコで塗装した擬コリント式壁柱といわゆるインド式壁柱があったらしい(Mizuno ed., 1967, p. 76)。

18 m の直径をもつ低い基台に支えられた、直径 15 m の圓胴部がある。これら全体は 13

m の残高で、上下ふたつの長方形基壇の上にある。上の基壇は高さがずっとおおきい。北が正面らしく、長方形基壇には階段が突出してつけられていて、圓胴部へと登っている。問題の車輪状構造は、圓胴部の内部構造であり、輻壁が規則的に中心にむかって収斂し、轂部はない。Shah-ji-ki Dheri や Kankali Tila とおなじである。輻壁は河原石を土泥でつなげた造り。このストゥーパの正確な年代ははっきりしないが、長方形の基壇は Azes II-Kujula Kadphises 時代よりはあとである。まず Azes II-Kujula Kadphises 時代である Sirkap の第Ⅱ層時代の市街に方形の基壇がはじめてあらわ

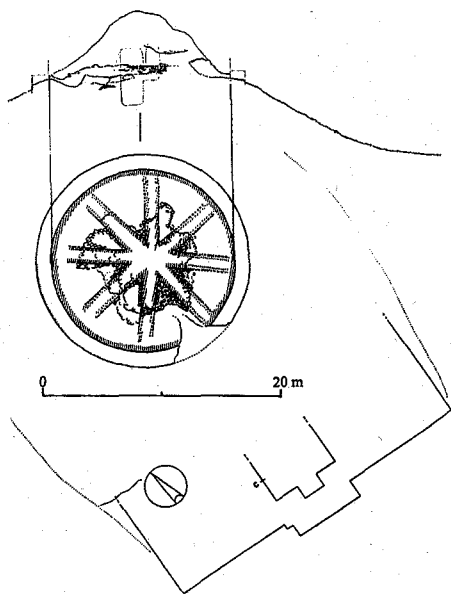


圖 15 *Fil Khana* ストゥーパ平面、見通し圖

れる。長方形基壇の出現はこれよりもずっと後になる。

2. 法輪説批判

車輪状構造を「法輪」にむすびつけるひとはとても多い。G. B. Sharma や S. P. Gupta (1985, p. 50) しかり, Snodgrass (1988, pp. 78 ff.) や Kottkamp (1992, pp. 73-78) もシンボリズムで解こうとする。車輪構造をそなえたガンダーラの遺構はみな時期がくんだり, 建築にそのような見える形で法輪を表現し, 象徴的宗教的意義を具體的にしめした, というのは Faccenna (1980, p. 29, n. 1) である。Sarkar は實際上の構造として意味があることをはじめて考慮にいったが, シンボリズム説を捨ててはいない。Sarkar (1960, p. 78) は, 構造の安定と用材の節約という2点を動機として Nagarjunakonda の大ストゥーパに車輪状構造が採用されたとする一方, 堅固さも煉瓦の節約もたいして関係のない小ストゥーパに車輪状構造がある場合は法輪だとしているのである。車輪状構造をストゥーパ建築史上發達した段階のものととらえ, この段階に至って法輪とストゥーパとのむすびつきが意識され, 車輪形式が採用されたとする。車輪構造のストゥーパは古くからの築造法の改良であつたばかりか, 象徴的な意味を建築の中にうまく移しこんだ發展形態であつたという。つまり車輪は佛教のダルマをあらわし, その形をとった建築法には, 思想建築構造両面の意味があるというわけである (Huntington, 1985, p. 179)。

ストゥーパの基礎部に輻壁を配置するのであるから, それは單に大規模に煉瓦を積むことを避ける工法にすぎないといったのは V. A. Smith (1969, pl. III) である。法輪説ばかりが唱えられるとき, こういった見方はおもしろいが, これでは車輪の形を説明していない。ここでおもいかえされるのは從來の法輪説の見方はいかにも單純だということである。その見方の誤りの最たる點は, 車輪状構造のデザインを上ばかりからみて二次元でしか評價していないことである。ちょっとでも横からみればこの構造の縦位置をまったく無視することはできないはずである。

北西インドの例について上にみたところをおもいだせば, もっとよく理解できよう。Dharmarajika の車輪構造は圓胴部から伏鉢にかかる部分の中味である。だからその位置は甚だ高所にあり, そんなところで法輪を示したものとはおもえない。しかも伏鉢なら半球形であるから, 法輪とは相容れない。轂と輻と輪のうちでどれひとつ欠けても車輪にならないのに Dharmarajika (圖12) や Fil Khana (圖15) では外輪がない。それでは法輪を示しているとはいえない。Fil Khana や Kankali Tila (圖7) では轂がない。Kankali Tila では輪壁がふたつある。Tahkal は年代の上でこれらとは隔絶するかもしれないが, ここも輪壁様のものがふたつある。これらは法輪とはおもえない。輪が二重の法輪は存在しな

いどころか、そんな車輪は実際にはありえない。Shah-ji-ki Dheri (圖 14) では幅もなく、外輪もないかもしれない。法輪とはほど遠い。

それなら南の例ではどうか。基礎部に限定して置かれ、それに高さという要素が加味されるのであるから、これは法輪などというものでは決してない。平面、水平面だけみるなら、たしかに車輪形である。しかし車輪状構造では横位置縦位置をともに考慮に入れる必要がある。そうするとそれは圓筒形である。圓筒形は轉がせば廻りけれども車輪にはならない。ここでは轂のない例はごく小さいストゥーパにみられるだけだが、Ghantaśala (圖 2) や Nagarjunakonda (Stupas Nos. 3, 9) (圖 6) では轂が方形であり、車輪とはいえない。南では一方、大規模なストゥーパでは外輪壁のほかには轂と外輪壁との間にいくつかの同心圓壁をおく例が比較的好い。これは北の Kankali Tila や Sanghol 第 1 ストゥーパ (圖 8) あるいは Tahkal Bala とおなじ趣向であり、車輪の輪のなかにいくつも輪をいれた車輪など車輪とはいえず、法輪を示したとは到底いえない。

これでもまだ法輪の可能性に固執するひとのためには彫刻に描き出された法輪とストゥーパの車輪状構造とをくらべればよい。いくつかの根本的な違いが浮かぶ。第一に、法輪の場合、轂は平面圓形に表現されるが、單なる圓形ではなく、實際の車輪の轂を描寫している。ところが車輪状構造では、圓形あり、方形あり、それを欠いたものもあり、多様であって、これでは法輪とばかりいってられない。

第二に、前述と重複するが、描寫された法輪では二重、三重の同心圓輪は絶対に存在しない。これは法輪といえど、空想で描いたのではなく、實際の車輪をそっくり寫したからだ。車輪状構造の場合は二重、三重の同心の環状壁が多く例でみられる。車輪のように一見みえるけれども、實は車輪とは何にも関係ないのが、車輪状構造なのである。

第三には、法輪を描寫する場合、輻の数には制約がないといってよい。多くてもいいし、すくなくともいい。これこれの数をどうしてもあらわさねばならないといった定則がない。表 2 には手元の例で数えた輻の本数を示しておいた。あまり意味はないとおもうが、ちょっとした傾向が各地に認められるのは興味深い。まず Sanchi 第一塔の塔門の浮き彫りをみると (圖 16)、法輪の輻の数は、16, 20, 22, 25, 26, 28, 32, 34。第二塔では 12 本と 16 本、第三塔では 17, 20, 24, 27 本である。ばらつきが大きい。Amaravati のパネルに描かれた法輪には無数の輻が細密に描寫される。これにはいつもぐるぐる廻っている法輪といった考えが、千輻輪として表現されているのかもしれないし、あるいは單に Amaravati 彫刻に共通する特徴的な細密な表現法のせいかもしれない。いずれにしても、輻が数えられる場合、その数は、28, 31, 63, 64, 81 本と多い。圖 17 は佛足の法輪の例である。

これらに較べてガンダーラでは輻の数はすくない (圖 18)。少ないのは、一般にガンダーラ彫刻の石質に原因があって Amaravati のようには表現できなかったのかもしれない

し、法輪が表現される浮き彫り部分の廣さ、大きさにもよるかもしれない。どっちにしてもおもしろいのは、佛足に表現された法輪と三寶標などの法輪とでは差がはっきりとしていて、前者は少数で、4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 20, 24 本、後者は多数で、24, 35, 42, 57 本といった傾向があることである。

法輪と車輪狀構造との輻數を比較して顯著な點は、法輪表現では奇數も認められ、輻數は一定しないという事實があるのに、車輪狀構造の場合は輻數には定則があることである。4, 6, 8, 12, 16, 24, 32 に限られる(表1)。輻壁の數としてはこれかぎりである。それは圓周を等分するのに容易な數であり、4 本の輻と 6 本の輻が基本になり、次第に二等分することによって數をふやすのである。4 本はコンパスで直徑をつかつて圓周上に 4 點をえ、6 本の場合は同様に半徑をつかつて圓周上に 6 點を得る。コンパスはこの場合不可欠である。4 本からは 8, 16, 32 を得、6 本からは 12, 24 を得、たやすく所用の數の輻壁がつくれる。Vitruvius は、ローマの劇場やギリシアの劇場をつくる時、まずオルケストラの圓周をつくり、その圓に内接するいくつかの三角形や四角形を、圓周上の各頂點を等間隔にしつつ作り、その頂點が基本となって、そこから客席への階段が放出され、次第にプランが形成されることをのべている(森田, 1969, pp. 222, 223)。ここではそんなに複雑な工程をふまなくてもよいのである。建設のひろい現場で車輪狀構造をつくる時、まず圓周を等分する必要があった。きちんと分割すればするほど構造は堅固である。要するに 4 と 6 は現場で圓周を等分することを容易にする。こういったきまった數が車輪狀構造に認められるのは、工事の現實によっているものであり、法輪なんかを造ろうとおもったのなら、分割なんかいい加減でよいのである。ついでにいうと、Arrianus が Pataliputra の市門を 64 門としていることに注目する Tucci (1971) は、帝王の住處と関連して 4, 8, 16, 32, 64 が聖數であることを論じ、16 本の放射壁をもつ Dharmarajika 大塔もこれに含めている。これでは 12, 24 の場合が解けないし、Nagarjunakonda には 10 本の放射壁をもったストゥーパ(Stupa No. 16)もまれながら存在する(Sarkar, 1966, p. 86)。

法輪について車輪狀構造とのかかわりを考えたのであるから、ヴェーダ祭式の rathacakra(戦車の車輪)についても言及しておく。これは Agnicāyana 祭式のために建設される祭壇のひとつの形式である(圖19)。Mānava Śrauta Sūtra や Baudhāyana Śulba Sūtra の二書の記事を Satyaprakash/Sharma (1968, pp. 162 ff.) と van Gelder (1985, pp. 311 ff.) に據って要約すると、この祭壇は焼成煉瓦ばかりを 5 層に積んで造られる。煉瓦自身も大きさ、形、數に至るまで厳格な規定にしたがってつくらなければならない。轂、輻、輪の位置や使う煉瓦の數など、祭壇にも適用される。これらの規定を定めた祭式書では、また、5 層のうち奇數層にそれぞれ意味を與えている。第 1 層は「地」であり、第 3 層は「空」、第 5 層は「天」である。

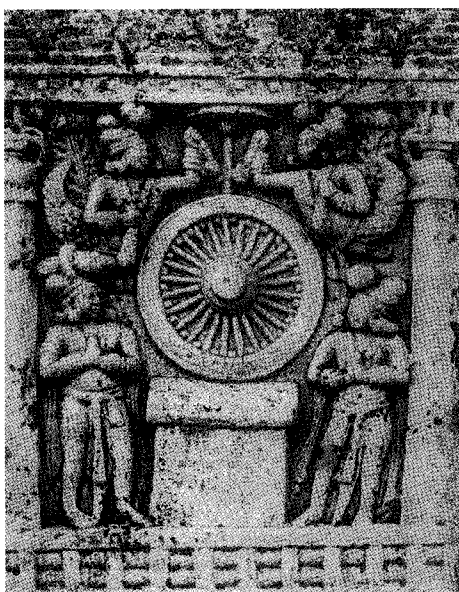


圖 16 Sanchi 第 1 ストूपパ北門浮彫の法輪



圖 17 Amaravati 大塔出土の浮彫佛足の法輪



圖 18 Gandhara の初轉法輪圖の法輪

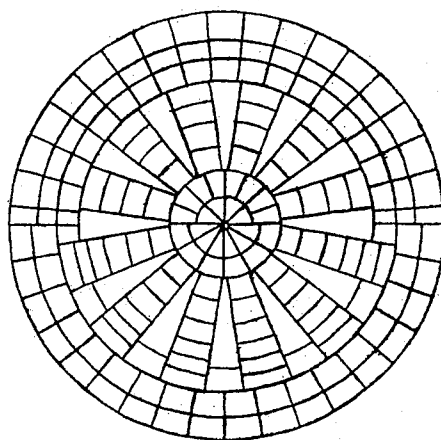


圖 19 Rathacakra 圖

車輪状構造をもつストゥーパとのかかわりの如何を考える場合、この車輪形祭壇で特別重要なのは、祭壇が特定の儀禮に際して築造され、しかもそれっかぎり、ふたたび利用されることなく見捨てられるということであろう。祭壇は祭式の執り行われる期間においてのみ神聖とみなされる。おわれれば禮拜の対象にもならないただの煉瓦積みにすぎず、放棄され、忘れ去られる。このように、Agnicāyana 祭式の如何なる側面も、車輪状構造のストゥーパとは無關係に相容れないようである。ヴェーダ祭式に起源するなにものも車輪状構造のストゥーパに取り込まれていないからである。つながりがあるとすれば祭壇の車輪状がストゥーパのものと似ているということにすぎず、その類似は佛教の法輪の場合とおなじで、意味がない。

そもそも圖象論者はストゥーパの年代を考えない。ストゥーパならどんな時代のストゥーパでもおかまいなく、その意味論に終始して編年を無視する。實は次第にあきらかになるように、車輪状構造は時期を限って出現する。そのことにシムボリズム論者は頓着しないのである。それでよいわけがない。法輪をあらわしたものであるなら、最初期のストゥーパから車輪状構造をなぜ使わなかったのか。なぜ時期を限ってあらわれるのか。なにを背景にその時期に法輪がストゥーパに内包されたのか。その意味はなにか。そうして、最大の問題として、なぜそれが圓筒形をしているのに法輪であるのか。これらがすべて證據をもって説明されなければ法輪説はなりたないであろう。車輪状構造はある特定の時期に、そうして南北の諸例であきらかなように、地域をも限って出現している。このことを念頭において出現の歴史環境を考えなければならない。

3. 初期ストゥーパの構造

法輪とも關係が無く、いわんやヴェーダ祭式とも無關係であったとなると、このような、いわば特殊な車輪状構造は、一體、なにに由來するのであろうか。それには初期のストゥーパをみなくてはならない。といってもさほどその例は多いわけではない。初期のストゥーパにこの構造を醸成する要素が隠されているかもしれないからである。

ストゥーパをはじめて造ったのが誰であったかはわからない。釋迦の骨灰をもちかえった八國の支配者たちであったかどうか、それはあくまでも傳説である。發掘の精粗をとわず、出土したストゥーパのうちで、ほとんど最初期と考えられるストゥーパには、實は車輪状構造はないのである。それだから車輪状構造のストゥーパをストゥーパ建築史上の發段階のものだという Sarkar の見解もでるわけであるが、以下にその例をのべる。

Vaiśali の最初のストゥーパは第5層の上に泥土をかためて築成された(圖20)(Sinha/Roy, 1969, p.18)。ここでは全部で7層あり、自然層の上ののっているのが第7層で、やわら

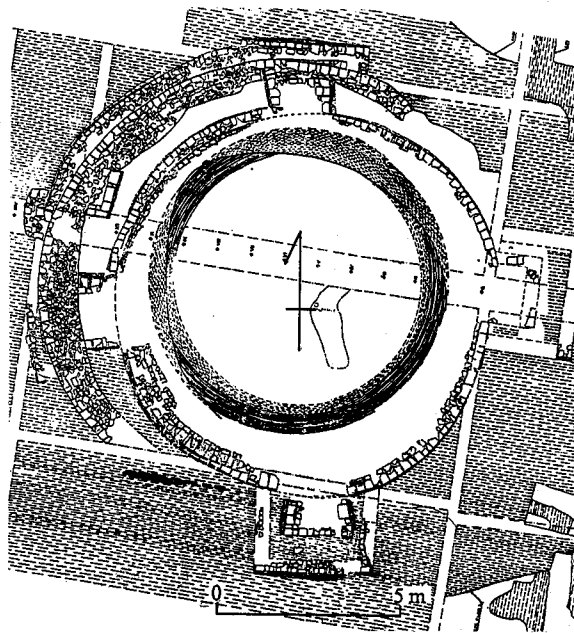


圖 20 Vaiśali のストゥーパ

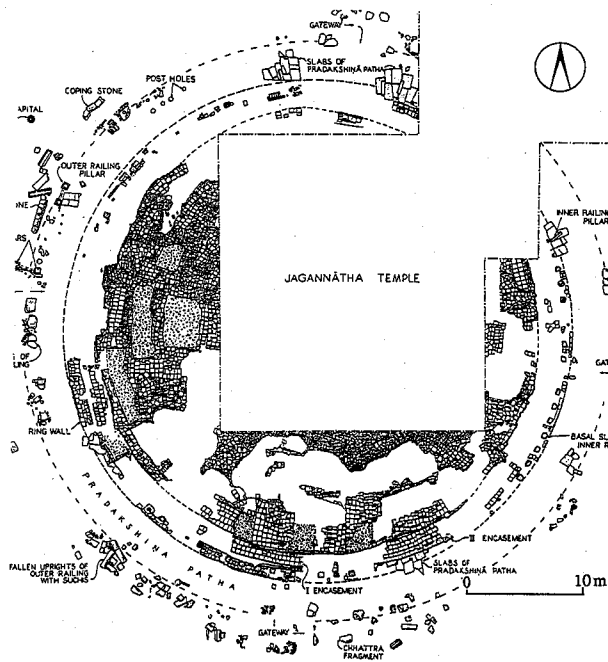


圖 21 Pauni の Jagannatha Tekdi ストゥーパ

かい沖積土。第6層は黄褐色堅緻土で、NBP 土器をふくむ。そのうえに薄く堆積した土層が第5層であり、遺跡の全体にひろがり、叩き締まった砂質土。NBP のほかに赤色、灰色土器があり、腐蝕した銅貨一枚があった。この土層の上面に最初のストゥーパは築かれた。復原直径約 8.16 m である。そのうちストゥーパの周辺部がくずれて、その上に第4層が被さった。第4層も NBP を豊富に含む堅緻な土層である。第4層の上面において第1回の増廣が煉瓦でおこなわれ、東西南北四面に ayakapatha がつくられ、ストゥーパの直径は約 11.21 m となった。増廣はその後3回あり、最後に北西部で一部補修がなされた。この歴史のなかで第2回の増廣までが NBP と共伴するので、最初の土饅頭ストゥーパから第2回増廣までは紀元前6世紀なかごろより紀元前3世紀の中におさまる。つまり、NBP とは Northern Black Polished Ware の略で、北方黒色磨研土器とでも譯され、ガンガー＝ヤムナー流域に紀元前6世紀から4世紀にかけて流行した土器様式であり、type-fossil となっている。このような古い時代のストゥーパにおいては車輪状構造はみあたらないし、全部土を突きかためてつくった低平なストゥーパである。

つぎに Maharashtra の Pauni の Jagannatha Tekdi ストゥーパ (Deo/Joshi, 1972) は、最初期のストゥーパの周囲の繞道を覆う土層から NBP 土器や BR 土器が出土しているから、Vaisali のストゥーパとあい前後するストゥーパである (圖 21)。最初のストゥーパの伏鉢が、ひとつのトレンチであきらかになった。その土層の断面によれば、構造としては、褐色の土泥をつなぎにして16層に煉瓦を積む。煉瓦の大きさは $40 \times 37 \times 10$ (cm) である。これを平面でみると、ストゥーパの圓形を方格にしきり、それぞれの方格の中を大型の焼成煉瓦を土泥でかためながら水平にならべ、次第に高く重ね積んでいる。当初のストゥーパの直径は 38.2 m であって、相當に大規模、莊重なものであるが、煉瓦の積み具合はさようなものであって、車輪状構造とは程遠く、またここから車輪状構造がかんがえだされたとも想えない。車輪状構造が煉瓦生産の經濟効率を圖ってあらわれた、とする見解は、このようなストゥーパからかんがえだされたものなのであろう。

初期のストゥーパについてこれらとは異なった築造法もしられる。それは Andhra の Bhattiprolu のストゥーパである (圖 22)。出土した3個の舍利容器の銘文字體は、紀元前200年ないしは若干古いとするひと (Bühler, 1894, pp. 323-329)、さらに百年さげるひともいて (Sircar, 1965, pp. 224 and 225, n. 5)、定まらないが、どちらにせよ紀元前2世紀をくだらないのであろう。Rea (1894) やそれ以前の報告 (Burgess, 1874, p. 124) によれば、發掘時の残高はわずか 4.2 m であるが、伏鉢は基部の直径 40.26 m、その下の圓形基壇の直径が 45.14 m、基壇の上面の繞道は幅 2.44 m という、すさまじい規模であり、ガンダーラの Shah-ji-ki Dheri を除くと、面積ではインド亞大陸中古今最大である。全体のつくりは、煉瓦を内實に、一層の厚みを 15 cm として規則的に排列して積みあげたもので、Pauni な

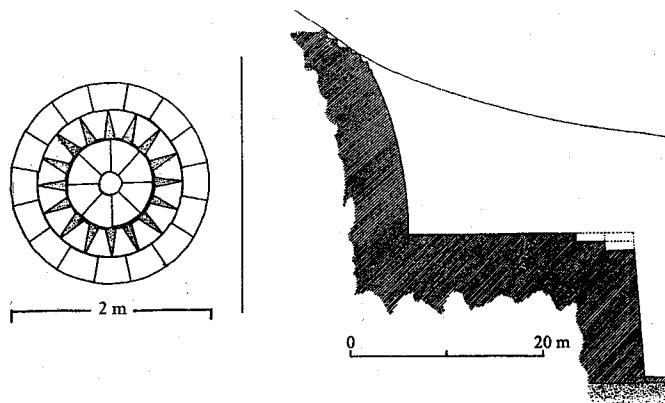


圖 22 Bhattiprolu のストゥーパ

どとにているといえは似ている。しかしここでは伏鉢の中心に、約 2 m の直径をもつ圓筒が頂上から下まで貫いている。この煉瓦構造は、中心は直径 22.5 cm の中空とし、同サイズの 8 個の煉瓦がそれを圍む。その外には 16 個の楔狀の煉瓦を中心へ向かうようにならべている。そうすると煉瓦間に三角のすき間があくから、そこを土で充填する。そうしてさらにこの外側に 16 個の煉瓦を同心圓狀にならべる。この圓筒狀煉瓦構造が中軸まわりだけに限られていたことは、その直径が 2 m、伏鉢基部の直径が 40 m 以上あることからすぐ承知できる。とすると、これは車輪狀構造とはまったく別ものということになる。

似たような構造が Piprahwa で Peppé が掘ったストゥーパでもみられた。マウンドの頂上に 3×2.4 (m) のトレンチを掘ったところ、煉瓦と煉瓦を土でかためながら何層にも重ね、同心圓狀にならべる構造があったという。煉瓦の大きさは $40 \times 27 \times 8$ (cm) と $38 \times 25 \times 8$ (cm) の 2 種であった (Peppé, 1898, pp. 573)。

「Dharmarajika や Butkara の主塔建築は伏鉢の中心から壁が放射している。そのような建築技術は、Shah Dheri の Shapur Tope (Foucher, 1905, p. 87) あるいは Kankali Tila のジャイナストゥーパ (Smith, 1969, p. 4) などのもっとも古い時代の建築技法と同じである」。かく認めるのは Fabrègue (1987, p. 34) である。これはいかにもおかしい認識である。Foucher が掲載する寫眞の Shah Dheri の Shapur Tope とは Marshall の呼稱では Dharmarajika であるし、Dharmarajika と Kankali Tila とは、車輪狀構造といっても全然異なっていること、前述のとおりである。ここでわざわざ Fabrègue をとりあげるのは、けちをつけるためではない。ガンダーラ佛教美術の起源を論じるその出発點に、このような車輪狀構造の理解があるのを問題にしたいのである。Butkara 大塔の中心から放射していると彼女がいう壁は問題である (圖 23)。Butkara のストゥーパは、つくるときに最初の核となる半球形を片岩で積んだ。この内核の根元まわりから、細かい石で敷石をつく

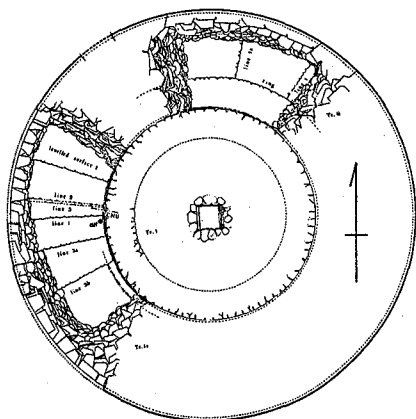


圖 23 Butkara I の大塔初期の平面

り、一定の範囲までくると段落をつくる。その段落の上にかぶさるようにふたび敷石を重ねていく。この作業を内核のまわりに螺旋状につみかさねていくと段落は内核を中心にしてそこから放射しているようにみえるのである。Faccenna は、平面形はストゥーパの車輪狀構造を想い出させるが、造り方としては輻壁とは全然違うといっている (Faccenna, 1980, p. 29, n. 1)。はっきりと車輪狀構造との違いをのべているのである。つまり Butkara のつくりは、Bhattiprolu や Piprahwa と同じ範疇にはいるともいえる。圖面だけみて本文を読まなかった

粗忽な誤解であり、Butkara には車輪狀構造はないのである。

このようにみえてくると、Sarkar がのべるように、車輪狀構造をもつストゥーパはストゥーパ建築としては一段と進んだ段階にあるようにみえる。しかしもし本当にそうなら、さきほどみた古い段階のストゥーパ、Vaisali とか Pauni などから次第にそれが展開して車輪狀構造をもつに至る過程の證據があってもよさそうだが、そんな段階のストゥーパは、以上のとおりであって、見つかったためしがない。Bhattiprolu, Piprahwa, Butkara などの最初期のストゥーパにおいて車輪狀構造のようにみえたものは、ストゥーパの中軸部だけに關する局地的な構造というほかに、車輪狀構造とは無關係である。

4. 車輪狀構造の地方差とその意味

初期ストゥーパとのかかわりもない車輪狀構造はなぜそのような形をもってストゥーパに採用されることになったのか。それをはっきりさせる手がかりは、車輪狀構造の地域差とそれぞれにおける特徴に求められる。みな南アジア大陸内に限定されることはよいとしても、亞大陸のどこにでもあるというわけではない。地域に偏在集中している。もっとも濃いのは南東地方、Andhra Pradesh で、Coromandel 海岸の北端、Krishna や Godavari の下流域である。つぎが北西地方で、古代の Gandhara、いまのアフガニスタン東部の Jalalabad から Peshawar をへてインダスをわたり、Taxila に至る一帯である。このふたつの地方が目だっている。ほかに Mathura とか Chandigarh のようなところもあり、南東地方と北西地方とをむすべば、これは中間に入る場所である。各地域における車輪狀構造の共通點はふたつしかない。輻壁があるという当たり前の事實と、中心の轂部の

有無とは無関係に、車輪狀構造が本質的に野外の大規模なストゥーパに使われた、という点である。南北の車輪狀構造は違いの方が大きい。このちがいこそ車輪狀構造の出自を物語る(圖1)。

まず南東インドであるが、ここではどの例もみな基礎に車輪狀構造を置き、外輪壁は極端に幅がひろく分厚く、中心には、圓形あるいは方形の轂部がかならず設けられ、いかにも車輪を模したようにつくられる。分厚い外輪壁はここではきわめて特徴的である。分厚い外輪壁の内部には、おおくの場合、同心の環狀壁がおかれ、輻壁が放射されて同心環狀壁をがっちり固めている。さらに南東の諸例で一般的に採用された、中心の轂部は、煉瓦を積んで造った圓形ないしは枡形の設備であり、ほとんどの例が煉瓦をびっしり内實に積み、若干の例では圓筒形、ないし方形の筒形となっている。Nagarjunakonda でいちばん小さなストゥーパを除けば、このことはストゥーパの規模とは無関係にみとめられる。こういった轂は、そこから放射する輻壁と環狀壁を支え、外輪壁の内部を堅固にする。Ter のストゥーパについてもいえる。Ter のストゥーパは南東インド型である。

こういった南東インドの諸例からみると、北西地方の車輪狀構造は異常である。輻壁といえば、それは中心に向かって収斂しているだけで、轂にあたるものはなにもない。かうじて Dharmarajika で轂のような設備をみることができるが、それは外圓の直徑にくらべて、あまりにも直徑がおおきく、南東インドの轂とは隔絶しているといってもいいすぎではない。したがって車輪狀構造の内部にいくら放射壁が走っていても、それを受けてやる設備が中心にないから、構造としては中途半端で、意味がうすかる。これ以上に無意味だともわれるのは、Dharmarajika や Fil Khana では外輪壁がなく、Shah-ji-ki Dheri でもあったとは斷言できないことである。百歩ゆずってあったとしても、Kankali Tila のように内側の環狀壁と同じ厚さであった可能性もある。そんなものなら圓形基壇を堅固にすることはできない。一方、Dharmarajika にはたしかに轂部はあるが、異様におおく、放射壁はそこから渦巻狀にでている。渦巻狀の輻壁なんか、構造として價值がない。北西地方のストゥーパはみな石積であるから、南東インドの煉瓦積にくらべて、どんな積み方をしてより堅固であるとはいえようが、それにしても外輪壁をまったくつけないのは異様である。

南東インドの車輪狀構造ではなぜそんなに厚い外輪壁が必要だったのであろうか。Amaravati や Ghantaśāla、それに Nagarjunakonda など、極端に分厚い外輪壁が多数みられるのは、内部からの壓がきわめてつよいことを物語っている。そのような厚みは、もし圓胴部が低平なものであったなら、必要ないし、また意味もない。とくに Amaravati 初期の石灰岩パネルにえがかれたストゥーパのような丈の高い圓胴部では、このような外輪壁のしつらえは、ストゥーパの内部構造にとって欠くことのできないものであったにち

がない(圖 24)。おそらく分厚い環狀の壁は伏鉢の壓を上からまともに受ける圓胴部の外壁であったはずで、伏鉢自身の外壁でもなく、伏鉢とその周囲の繞道を支えることを目的としたものでもなかったであろう。したがって、このような分厚い外輪壁をもっているストゥーパの圓胴部つまり圓形基壇は、相當に丈が高かったということである。むしろ、丈高い基壇を得るために、こうした外輪壁をつくり、その幅を厚くし、さらに内部に輻部から放射狀に輻壁をつくり、中心と外輪とをむしり結び、構造を一層堅固にしたのであった。半球形の伏鉢を得るために、その基部外周に分厚い環狀壁を造ってかためるなどということはしまい。伏鉢の壓は圓胴部がうけるから、圓胴部外壁には龜裂が生じる。これを防ぐためには外輪を厚くすればよい。大きな面積を占め、しかも丈の高い基壇をもつストゥーパには、分厚い外輪壁は是非とも必要であったのである。そうして、外輪壁の厚みのいかんは、基壇をどのくらい高くするかによったはずである。低ければこれは不必要であり、高ければ厚くする。こういった外輪壁を含む車輪狀構造が、南東の諸例ではストゥーパのもっとも下位に置かれたのであるから、あきらかに圓形の基壇を高く建設することをめざしている。そうすることによって圓筒形の基壇は上部からかかる壓に對して堅固となり、外壁の割裂を防止する。分厚い外輪壁は圓形基壇が高かった事實を示しているのである。

かくして南東インドで野外に車輪狀構造をもって造築された大ストゥーパは基壇が高かったと見る必要がある。基壇が高いというのは、基壇の直徑に對して高さがそれと同等か若干低いかということとらえる。野外の大ストゥーパが西インドの前期石窟寺院にみられるストゥーパと同時代の産物だとした場合、石窟寺院内の小ぶりのストゥーパだけは基壇が高く、野外のストゥーパでは低いというのは理解できないおかしさである。分厚い外輪壁は圓胴部が丈高の場合にかぎって有効な構造であり、内部が輻壁によって補強されるとき、兩者相まって内部からの壓に耐え、圓筒形の外面の煉瓦積みの割裂を防止し、基壇の安定性を獲得する。したがって Barrett (1954) が Amaravati 大塔の復原研究においてストゥーパの基壇を著しく低く歪めて圖化してしまったのは、おおいに問題がある(圖 25)。分厚い外輪壁とその内側の構造にかれば想い到りながら、分厚い外輪壁の意味を全然理解していないからである。一般に、Gandhara のストゥーパについては時代とともに基壇が高大化していくといった見方がある。この見方はかならずしも當っているとはおもわないが、Gandhara 以外の大ストゥーパについてなぜかこの點に關する議論はなかった。野外の大ストゥーパは低平なのだといった Marshall 以來の考え方にしばられてきたのであろうが、南東インドでは野外の大ストゥーパの場合、車輪狀構造を容れることによって基壇を高めていたとみるべきである。

北西インドの Taxila の Dharmarajika 大塔では輻壁が伏鉢の中につくられた。



圖 24 Amaravati 初期のストゥーバ

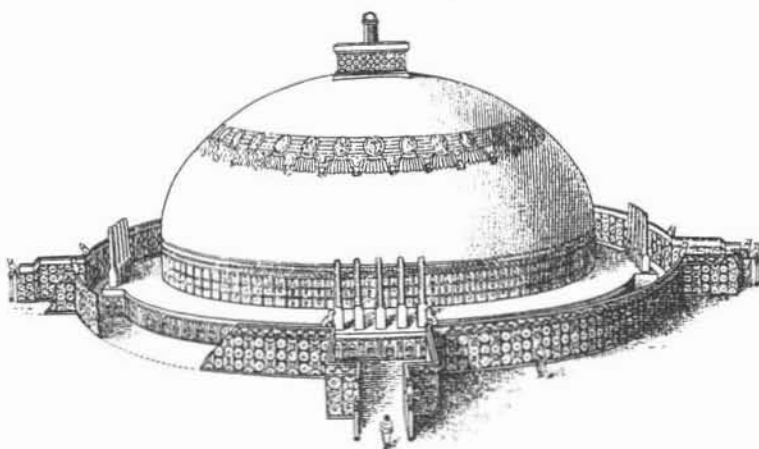


圖 25 Amaravati 大塔の Barrett による復原圖

Dharmarajika 大塔の残高は周囲の地面から 13 m である。そのてっぺんに輻壁が露頭している。輻壁が収斂している中心の大圓形轂部の高さはあまりにも高い。葛石以下の基壇の高さを引いても高い。そのうえ、ここにはどこをみても外輪壁がない。輻壁はそのまま伏鉢の外面に至っている。おなじことが、Fil Khana のストゥーパについてもいえる。外輪壁はないし、輻壁はストゥーパの残ったもっとも高い地點からみとめられること、Dharmarajika と同様である。二つの例は偶然ではなかろう。北西インドのこれらのストゥーパでは、車輪構造は伏鉢の構造であり、圓胴部、あるいは基壇部のものではなかった。さらに、こういった輻壁と輻壁との間は、Dharmarajika の場合は碎石、Fil Khana の場合は河原石で充填し、繋ぎには土泥をつかっている。そうすると、ストゥーパの堅固さ、安定度は高い。南東インドのようにすべてを煉瓦で造る場合とは異なって、石積という點からして北西インドでは外輪壁をつくる必要がなかったのかもしれない。Dharmarajika の車輪状構造は基壇の上にのせた恰好でつくってあり、それ以下には至っていないことがわかっている。車輪状構造は何回目かの修復のときの建築である。それよりも基壇は古い。そんな工事も、用材が石、どちらかといえば平らな石だったから、可能であった。

外輪壁をつくらず、車輪状構造自体をストゥーパの上層に置くというのは、まさに異常である。その理由としては用材ばかりではなく、もっと本質的に重要なこととして、この地方が圓形基壇よりも、方形基壇に重點を置いていたことがあげられる。しかし方形基壇と一口でいっても、ストゥーパの成り立ちからみれば奇妙な形であり、本来異常である。そんな方形基壇がはじめてあらわれたのは、Taxila の Sirkap の第Ⅱ層時代の市街のストゥーパであった (Marshall 1951, pp. 142-144, 163-167, 183)。形としては、古くからの傳統である圓胴部以上の要素は變えていない。それら全體を方形基壇を下にもってきてそれで受けたのである。方形の基壇をいちばん下に設置しただけだといっても、インド古來のストゥーパにとっては革命的である。なぜならば、ストゥーパ禮拜の右繞は宇宙軸を中心にした圓環運動であるから (Irwin, 1979)、方形では意味がない。北西地方のストゥーパではこのような方形基壇がストゥーパ本體を支えていた。方形基壇の高さを高くすれば、ストゥーパの高大化は達成できた。だから南東インドのように圓形基壇しかもたないストゥーパでは圓筒部の外壁を厚くするしかなかったが、ここではそんな必要はなかったのである。

それならば、車輪状構造なぞ不必要なはずである。どうして利用したのか。しかも南の車輪状構造とは似ても似つかないかたちで採用している。このような南北の、車輪状構造に対する對應のちがいこそ問題である。南東インドの工人の眼からすれば、北西地方のはずいぶん變った代物である。北西インド、つまり Gandhara のそれは二番煎じといってよい。南東インドの方が本來の姿であり、北のは本來の意味を理解しないままで受け取っ

たものだ。これを年代の差によるものにとってもよい。それでは、南東インドの車輪狀構造はなにに由來したのか。すでにわれわれは車輪狀構造の出現について、インド内部の可能性を検討したが、みな悲觀的であつた。そうすると、外部からのインパクトを考えるしかない。外部をいう場合、それがいつの外部かという意味でストゥーパの年代がからむ。いま場所は南東インドと定まっているのだから、次ぎは時間が問題である。

ここでもう一度注意したいのが車輪狀構造ストゥーパの分布である。インド美術史なるものがいうところの、ガンダーラ美術やマトゥラー美術、あるいはアマラーヴァティー美術といった初期佛教美術の地方に、それは限られているといつてよい。その美術は時代が限定されるのであるから、そこであらわれる車輪狀構造のストゥーパというものも、年代がおのずから限られてくるであらう。すくなくとも、永い間にわたつて好まれたのではなく、紀元前後の數世紀といった、一定の期間に流行つたといえる。ここにおいて車輪狀構造の初現年代に觸れるとすれば、Nagarjunakonda の諸例は除かれるであらう。Sarkar がいうように Nagarjunakonda には Ikshvaku 朝時代以前の、つまり 3 世紀以前の遺構はないからである。車輪狀構造をストゥーパの基部に用いるという傳統は、それより古いのである。Nagarjunakonda はそれをそのまま受け継いだのにすぎない。初現にちかい車輪狀構造のありさまを Nagarjunakonda では期待できないのである。そうすると、いままで擧げてきたストゥーパのうち、どれがもっとも古い車輪狀構造をもつたものかという問題になる。しかしこれはなかなかむずかしい問題である。われわれは Nagarjunakonda の諸例を参考に、また Amaravati の項でのべたように、1 世紀には Krishna-Godavari 河口地帯でそれは採用されていただろうということで、當面満足しなければならない。

5. アウグストゥス靈廟

車輪狀構造の出現をこの時間のなかで、しかも亞大陸外に求めるとなると、それはローマの物産をインドにもたらし、またインドの物産を西へ運んだアラビア海の海上貿易が浮上してくる。半島部インドの歴史にとって重要なポイントを與えるその交易は、ピークを 1 世紀にむかえる (Warmington, 1974, pp. 35-38)。とくに最近の Begley らの研究 (Begley/Puma, 1991, p. 6) は、1 世紀の半ばの重要性を考古學上確信させてくれる。このような紀元前後の、半島部インドのひろい歴史の文脈のなかで、大規模ストゥーパの建設に、ローマ帝政初期の靈廟建築の技術が輸入された。このことについて以下にのべる。

車輪狀構造はインドばかりでなく、帝政初期ローマのイタリアを中心に、北や北西の屬州でもひろく好まれた墳墓建築技術であつた。「インドばかり」というと語弊がある。車輪狀構造は實はインドのものではなく、ローマで發明された技術であり、ローマが本場だか

らである。

紀元前後のローマの墓廟建築のなかでもとりわけ注目されるのが、石造あるいは磚造の一連の圓形墓である。圓形墓という形はエトルスクにまでさかのぼるけれども、その内部に車輪狀構造をいれたのは Augustus 霊廟を嚆矢とする(圖 26) (Toynbee, 1971, pp. 143 ff)。Crema (1959), Toynbee (1971), Eisner (1976), Virgili (1984) などに従うと, Augustus 霊廟は, 基底部の直径が 87 m もある。墓室の中軸には柱が立っていて, それは墳墓の頂上にまで達し, 總高 44.65 m あったらしい。頂上には皇帝自身の彫像をすえていたという。中軸をまわって 5 重の同心圓壁, つまり壁として厚みのある巨大な圓筒が五重の入子になっている。これらが上部構造を支持していた。同心圓は外にむかって高さを遞減していたというのが通説である。もっとも外側の圓は墓廟全體をささえる壁である。外壁はトラヴァーティン石が張ってあった。中心から第 2 番目の環狀壁と第 4 番目の環狀壁との間は 12 本の放射壁があって, これらの圓筒壁を相互に補強し, さらに放射壁は外へのびて外輪壁に結合している。内壓からくる割裂の防止や外壁の安定性に對する對策は, 外輪壁をほかの環狀壁よりも厚くすることであり, ここでもそうである。Augustus 霊廟ではさらに

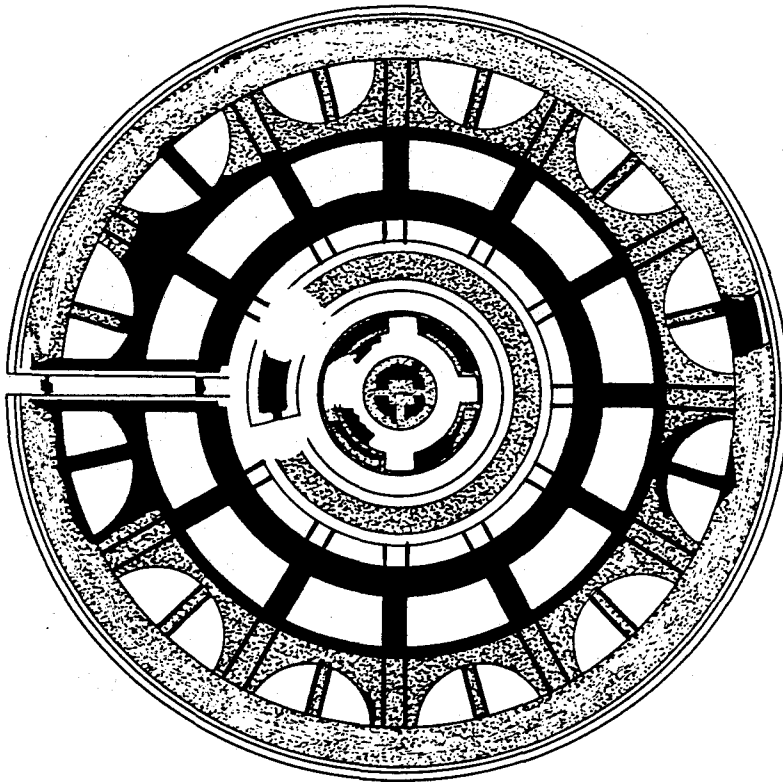


圖 26 Augustus 霊廟平面圖

一層の対策がとられている。すなわち 12 本の放射壁で分割された、第 4、第 5 の環状壁の間、もっとも外側の環状の空間は、さらに各空間を水平アーチと放射壁で補強しているのである。第 4、第 5 の環状壁でかこまれた部分は、実は兩壁を合わせた厚みより厚く、きわめて安定のある外輪壁となっている。内部からの壓に充分對處でき、建築としての安定性を確保する構造が十二分にとられた。

Augustus 靈廟の復原研究はいろいろおこなわれている。Toynbee (1971) はおそらく Crema (1959) によったかとおもわれるが、いくつかの例をあげ、現状ではいずれともきめがたいという。しかしそうであろうか。これだけ外輪壁を厚くして内壓に對する工法を創案したことを考慮したうえの復原でなければ、復原の意味がない。つまり、Augustus 靈廟でこのような分厚い外輪壁が企畫されたのは、それが 87 m という途方もなくおおきな直径をもつ圓筒に對處する必要があったということと、第 3、第 4 の環状壁以内の高さが高く、そこからくる高い壓に耐える工夫が必要であったからである。Crema はいくつかの代表的な復原案を 4 例あげている (圖 27)。そのなかで Gatti や Cordingley/Richmond,

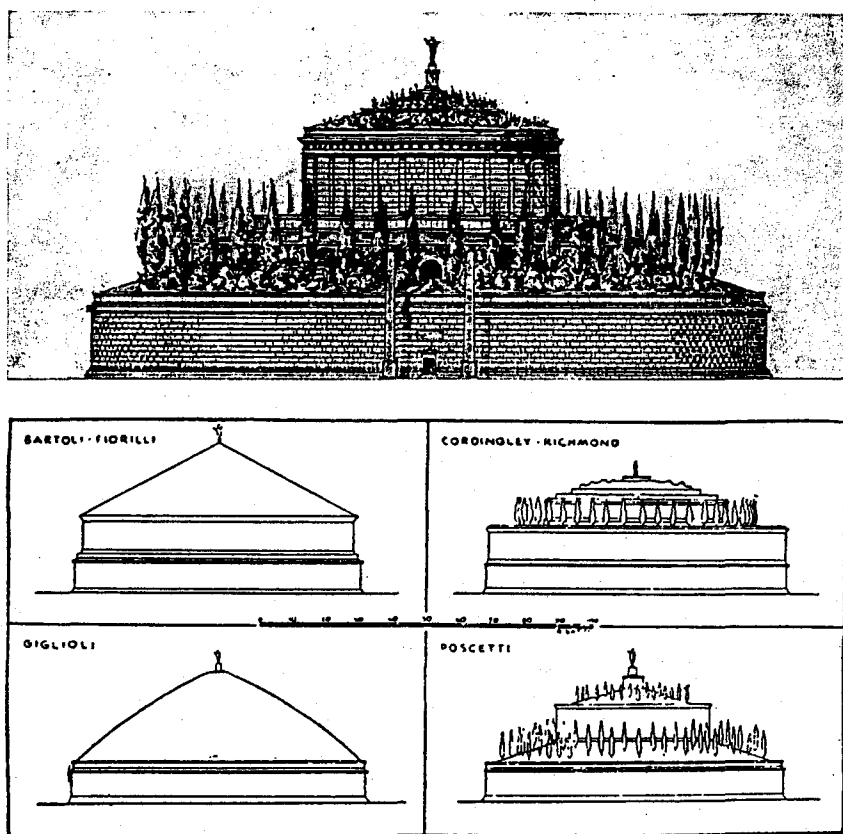


圖 27 Augustus 靈廟の復原 5 例

Poscetti のような、なかに圓筒をおいたような復原ではそれが生されない復原である。どちらかといえば、Bartolli/Fiorilli のように上部はかなり高い半球形であり、外輪壁の高さも Giglioli が考えたよりずっと高いであろう(圖 27, 左上)。こうみえてくると、Augustus 霊廟の構造は南アジア大陸のストゥーパ構造と、技法上類縁性を否定できないどころか、むしろ、積極的に両者は関わっている。とくに南インドのストゥーパとの関連は、外輪壁の一点をとっても、おおきい。

おおきさはまちまちであり、輻壁があったり、なかったりするけれども、輻壁をそなえた圓形の丘墳が、1, 2 世紀ローマの北部あるいは北西の屬州で築造されていた。その來由は Augustus 時代のイタリアをおいてほかにありえないであろう (Toynbee, 1971, 180)。それぞれの土地に圓形墓や圓形廟の傳統があり、またブリタンニア、北部ガリア、中央ヨーロッパの屬州とその周邊地域、これらと本國イタリアとは密接な關係にあったからである。しかし最も大規模かつ堂々たる地方墳墓にしても、Augustus 霊廟からは疑いもなく距離は遠い。それにもかかわらず圓形、土饅頭、輻壁、輻壁等々の特徴を遠いイタリアと共有し、Augustus 霊廟の基部にある同心圓壁と輻壁を想起させるのである。例を Toynbee (1971) と Collingwood-Richmond (1969) からひいて以下に示す。ローマ周邊の例に関しては Eisner (1986) の專論があるので参照されたい。

- (1) Kent 州の Keston 圓形墓は、直径 8.7 m の小規模な墓で、基部が低い圓筒形、上部は圓錐形である。フロントを積んだ環狀壁の厚さは 90 cm。6 本の扶壁が放射狀に外壁から飛び出している。墓室への入口はない。
- (2) Essex 州の West Mersea 墓はうえとおなじように 12 本の扶壁をもち、19.5 m の直径。環狀壁は 90 cm の厚さ(圖 28)。この墓はいわゆる「荷車形」で、ちいさな轂から 6 本放射壁がでて環狀の外壁に至るが、みな扶壁と對應している。放射壁 8 本、4 本のもの、ローマの Via Appia の第 5 里標附近にある。Via Tiburtina の墓では轂がなく、輻は 8 本、Via Salaria のは 6 本の輻がある (Toynbee, 1971, p. 184)。
- (3) ベルギーの墳墓は構造上はブリテン島のものとおなじだが、直径が 12 m から 43.5 m までと、一般に大型であり、時期も大概 2 世紀である。
- (4) ベルギーの Tournai 近くで 1954 年に發

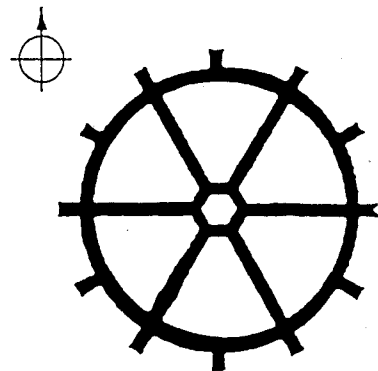


圖 28 West Mersea 墓平面概念圖

掘された Antioing の墳墓,あるいはドイツの Trier の墳墓, またブリテン島の Keston や West Mersea の墳墓など, これらの墳墓をつくった地方の工人たちが, この手の墳墓をつくるための, ローマできの建築圖とか, 建築手引のようなものをもっていたのはまちがいが無い, と Toynbee はいう。さらに, Trier のふたつの墓, Nennig, Fremersdorf など, Treveri 族にかかわる, 計四つの同じ構造の墳墓を築造したひとたちにも, このことはあてはまるという。

(5) Fremersdorf の例は煙滅してしまったが, 中心の轂から 4 本の放射壁がでて水平アーチを竝列した外輪にいたっている。Keston や West Mersea の墳墓におけるように, 上の四つの Treveri 族の墓はみな, 外輪壁は基本的に「圍い」としての役割をにない, 圓錐形の土饅頭を外側から保持するものであって, Augustus 帝廟, Caecilia Metella, Hadrianus 帝廟などイタリアの壯大な圓形墳墓の, 丈高い, 記念碑的な石造の圓胴部とは異なる。こういった石の「圍い」は Beaker Culture の墳墓にみる柵, あるは青銅器時代や Halstatt 期の墓をとりまく石壁ににている。

Treveri 族の四墓に關して, 外輪壁が圓錐土饅頭を支える, 石の「圍い」にすぎないとする Toynbee の觀察は興味深い。これらすべて, 外輪壁の幅はたしかに厚くないからある。イタリアの大墓廟建築の丈高い圓筒外壁とは異なっている。分厚い外輪壁は外壁の高さと關係がふかいことを證明しているのである。

上引のなかでさらにもうひとつ, 南アジア亞大陸における車輪狀構造ストウーパの出現にとって意味ぶかい Toynbee の指摘は, ローマの北部ないし北西屬州のこのような墳墓築造者たちが, イタリアできの建築手引とか建築圖のようなものをもっていたと予測したことであろう。しかしローマ出來の建築手引があつたとしても, なぜ, 北部, 北西部のひとたちの手にそれがわたつたかということであろう。要請がなければ傳入しなかつたのではあるまいか。

インドの場合はどうか。外輪壁を軸に Augustus 帝廟と南東インドのストウーパが近縁とみると, まっさきに車輪狀構造がはいつたのは南東インドとなるが, インドへの海上交通とその傳入はどうかかわってくるのであろうか。たしかにこの交通は, アレクサンドリアから紅海沿岸を経てインド半島の南西部に到り, あるいは半島のつけ根に達して, ローマの物産や貨幣をもたらした。あるいはいまの Coinbatore に比定されている Muziris においては, Templus Augusti (Augustus 帝をまつた神殿) の存在をもつてローマ文化に浴したひとびとの居留まで想定できる。「(ブリタンニアの) Hertfordshire の森から(インドの) Coromandel 海岸の椰子林まで, 赤いうわぐすりをかけた杯皿類(アレチウム陶のこと)は交易商人のお定まりの冒險を象徴し、かれらの冒險譚はアレクサンドロス大王自身の遠

征譚をほんの少ししたまわるにすぎないとしてよい」と記したのは、Coromandel 海岸の Arikamedu においてローマとの海上による交易を實地に証明した Wheeler である (1954, p. 150)。ローマ文化は屬州はもとより、西ばかりでなく、東はインドまで直接やってきた。こういった交易品のなかに車輪狀構造といった眼にみえない輸入品がふくまれていたとすれば、具体的にはどんな具合にやってきたのであろうか。もし海上交易の結果だとすれば、それはきわめて大きく偶然性に左右されたものであろう。そんな偶然にたまたま觸發されてストゥーバの中に車輪狀構造が入ったとは、私にはかんがえられない。

6. 車輪狀構造導入の積極性

車輪狀構造は當時必要であったからこそ積極的に採用されたのである。そこでふたたび半島部インドの分厚い外輪壁の意義が強調されねばならない。Augustus 霊廟でもいちじるしく厚い。直徑に比例して相當に分厚い外輪壁が存在した。厚みをもつ外輪壁は、その外輪壁が維持する圓形基壇の高さと深い關係にあった。外輪壁の厚みが厚ければ厚いほど、圓形基壇の高さは高かった。基壇が低いものならば、外輪壁を厚くしてもしようがない。上部や内側から高壓を外壁がうけないからである。

しかし當時野外の大ストゥーバの基壇がすでに高かったとする證據は皆無である。最初期のストゥーバの高さは、さきにのべたように、そんなに高いものではなかったとおもわれる。Sanchi の大塔の時代、つまり紀元前後になっても、野外の大ストゥーバの基壇はそれほど高かったとはおもわれない。Sanchi 大塔の復原整備に際して Marshall (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940) が決定した高さはだいたい當時残っていた高さにしたがっているからである (圖 29)。丈高い圓形基壇を造りうる技術が在來のインドにあったのに、それ

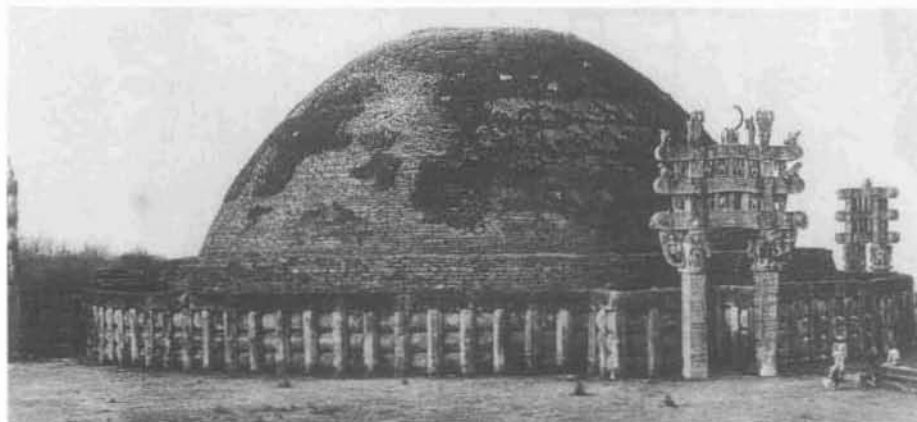


圖 29 Sanchi 第 1 塔復原圖



圖 30 Bharhut 大塔欄楯のストゥーパ圖

にかわる高度な技術としてローマから車輪状構造を輸入したのではない。車輪状構造が採用された同時代のインドにおいては野外の大ストゥーパの基壇はみな低かったのではなかったか。ストゥーパにはいろいろあって、屋内に造るものと野外に築造するものがあることは、すでにふれた。西インドの石窟寺院のうち、前期寺院の *caitya* の奥の圓堂部に掘り出されたストゥーパでは、圓形基壇は直径と同じか、あるいはそれより高くつくられている（圖31—圖34）。屋内のストゥーパは規模がちいさいから、簡単に基壇を高くすることができる。しかし野外に大規模なストゥーパを建設する場合、上部から強い壓を受けて、なお外壁に割れが生じない大圓筒形を煉瓦でいかに築くかは、煉瓦の量の問題が解決したとしても、なお大問題であつたろう。インドの1世紀にその技術はなかったのである（圖30）。野外に大ストゥーパを建設するとき、その圓形の基壇を高くする技術が、ちょうどこのころ要請されていたのである。

ヨーロッパの北や北西における車輪状構造の出現は、帝政初期ローマとブリタンニアやガリア北部との繋がりの中で容易に理解できる。Augustus 霊廟の建築技術はローマ周縁部やイタリアにすぐにおよび、ブリタンニアやガリアにまで迅速におよんだ。その理由は、Augustus 霊廟が直径 87 m という當時の世界最大の建築であつて耳目をそばだてたという以上に、これらの地方で圓形墓を築造する傳統にくわえ、當時の最新技術あるいはローマ風新趣向にあやかるという風潮もあつたであろう。しかし、インドの場合はそういった文化の波及の圏内にあつたわけではない。

正確にいつ車輪状構造がローマから輸入されたか、どのストゥーパにはじめてあらわれたかをきめることは、現状ではいたってむずかしい。それぞれのストゥーパの年代を決める手掛かりがすくないからである。さきほどのべたように、Toynbee はヨーロッパ北部、北西部における車輪状構造の出現をイタリア本地出来きの手引書の介在に求めたが、それを考慮したうえでもなお重視する必要があるのは、インドの使節がローマで車輪状構造を直接実際に見聞したであろうことである。Warmington (1974: 35-38) に従って Strabo や Dio Cassius を参照すると、インドの使節が Augustus 帝の時代になると頻繁にローマにやってきたという。かれらは紀元前 26 年にはじめてローマに到達し、スペインで Augustus に會っている。さらに 25 年、21 年、17 年とそれは續き、14-11 年の間にも一回認められる。このことは、『*Res Gestae Divi Augusti*』——神君アウグストゥスの業績録——からもあきらかである。その標題はともかく、これは Augustus が自ら死の年 (14 年) に書いたものであり、「自筆の本文をティベリウスが校訂し標題をつけ、故人の希望どおり青銅板に刻み、それを Augustus 霊廟の正門入口の両側に、一本ずつ建てた四角形の大石柱に、四面を覆うようにはめこんだ」とされる（國原，1986, p. 206）。すなわちその 31 條に「インドから王たちの使節がたびたびわたしのもとに遣わされた。その以前はいかなる



圖 31 Bedsa 石窟のストゥーパ

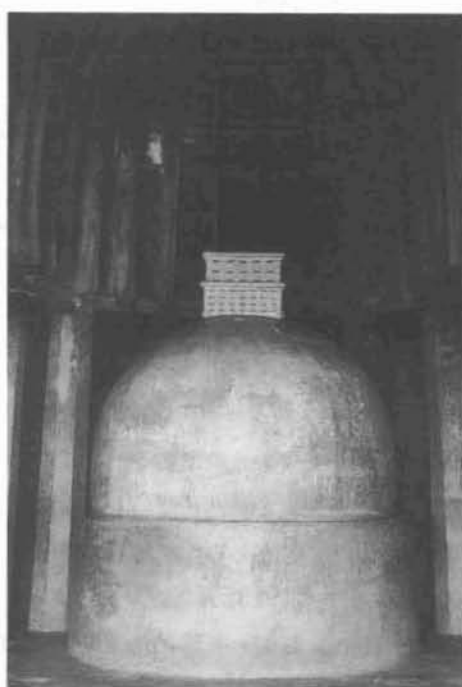


圖 32 Bhaja 石窟のストゥーパ

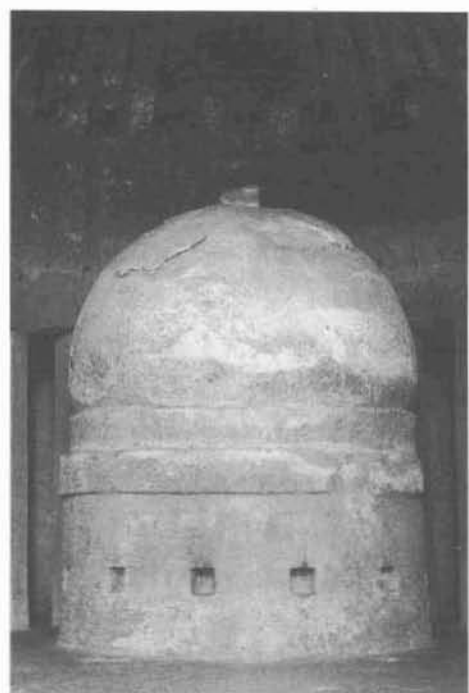


圖 33 Kanheri 石窟のストゥーパ



圖 34 Karla 石窟のストゥーパ

ローマの將軍の前にも、現れたことがなかったのに。」と(國原, 1986, p. 223; Brunt/Moore, 1967, pp. 34, 35)。この場合引用中の「使節」にあたることばは複数形をとっている。Augustus 霊廟の建設が紀元前 28 年であることは, Suetonius の *De Vita Caesarum* (ローマ皇帝傳) における Augustus 葬儀のくだりに, 「遺骨は……アウグストゥス霊廟に埋葬した。この霊廟はフラミニウス街道とティベリス河岸の間に, アウグストゥスが第六回執政官の年に建てていた。」(國原, 1986, p. 203) と記されていることからあきらかである。Augustus が第六回執政官の年とは前 28 年である。とすると, インドからの遠距離交易の商人たちではなく, インド王の使節, つまり公式なインドからの使節が Augustus に拜謁したのは, なんと霊廟建築開始後わずかに 2 年目であったことになる。當時世界最大の建築にローマ人士のうわさは高かったであろう。はじめてローマに到達したインド使節たちもそれに注意を向けたはずである。その大建築は圓形プランの大建築であり, みずからの土地のストゥーパ建築に照らしてその技術にたかい關心をもたなかったはずがない。

車輪狀構造がローマとの海上交易によってはじめてやってきた技術だとしたら, いつ來るかわからないものを黙って待つしかなかったであろう。偶然に到來したから飛びついてストゥーパの中に採り入れてみたのであろうか。そんな技術がインド側の要請もなしに舶載されてくるであろうか。積極的にインド側からこれを求めたとみなければ問題の解決にはならない。紀元前 26 年にはじめてローマをおとずれ, Augustus 帝に拜謁したインド使節が実際にローマでこの技術に接してインドにもたらしただけではなかったか。Augustus 霊廟の車輪狀構造は古くからローマにあったものではない。直徑 87 m という大圓筒形の建設に際して考案された最新技術であった。それだからこそ, かれらは積極的にそれを攝取したのである。したがってインドにおける車輪狀構造ストゥーパはすべて前 26 年をさかのぼらない。Augustus 帝に拜謁した使節を, インドのどこの, だれ王が送り出したか, 今の西インド邊の西クシャトラパか, あるいは南東インドの支配者か, これは残念ながらわからない。ただし, もっと北の Taxila-Gandhara あたりの勢力でなかったことだけは確かである。そのあたりの車輪狀構造がいかに車輪構造の本義を知らず, 二番煎じであることは先述したとおりである。そんなものをローマから直輸入した連中がはじめから造るはずがないからである。

7. 導入の年代と意義

ところで, 本義に近いか遠いかといった差を傳達の時間差ととると, もうすこしだけ車輪狀構造の導入年代を狭めることができる。Gandhara のストゥーパの年代については, Andhradeśa のものより幾分か鮮明であり, Taxila-Gandhara のストゥーパの年代を考

えることによって、導入の最初の地である Andhra のストゥーパの年代に枠をはめることができるからである。手がかりはタキシラの Dharmarajika 大塔である。

車輪状構造が本来ローマ皇帝廟の基礎の大圓筒形を強固にするために案出されたものであったこと、それに、この事情がよく理解されてつかわれた Andhra 地方の使い方からみると、伏鉢という上部構造に車輪構造を使ったこの大塔は、本義にまったく無頓着、というより、むしろ無知とってよいであろう。これに較べると Gandhara の Shah-ji-ki Dheri や Mathura の Kankali Tila は、基壇こそ低けれ、基礎にこの構造をつかっているという点で、まだしも本来にちかい。しかしどちらも穀相當の設備を欠いているから、車輪状構造本来の意味からは離れている。そこでこの違いに注目して、それを年代差とみると、Dharmarajika の伏鉢部の建設年代がきまれば、これをもっとも新しい車輪状構造の南アジア大陸における型式とみて、車輪状構造輸入の下限年代を定めることができるであろう。

Dharmarajika 大塔の伏鉢内部を補強した放射壁は圓形基壇のすぐ上から立ち上がっていて、基壇の中には基礎をもっていない。まえにふれたとおりである。つまり伏鉢部は當初の建築ではなく建て直しである（桑山, 1974, 335 f.; Marshall, 1951, p. 236）。同時代の建て直しは Taxila のほかの地域にもみられるが、このとき考案されたのが Diaper と名づけられた壁の外装の石積である（圖 36）（Marshall 1960: Pl. 10, b, c）。その Diaper 積が放射壁を造った伏鉢の外装に使われたらしい。というのは、現在残されている伏鉢の外装をみると Diaper 積が伏鉢の西側の基部に若干残っているほかはみな Diaper 以後の幾種類かの石積であり、Diaper がいちばん古い石積だからである（Marshall, 1951, p. 236）。したがって Diaper 積の年代を確定できれば放射壁の年代、車輪状構造の年代を推せる。

タキシラでは時代に従って建造物の石の積み方が變遷する。Rubble masonry（亂石積）（圖 35）はおそくとも紀元前 6 世紀から數百年にわたって永續した（Marshall, 1960, pl. 10, a）。都市 Sirkap のほとんど最後の市街である第 II 層期（Wheeler の Phase 3 に相當）、だいたい紀元後 1 世紀に Diaper 式があらわれてこれにとってかわる。亂石積は中位のおおきさの石を單純に積み、石と石との間には小さなバラスを詰めこんでいく。これに對して Diaper 式では、石の大きさをだいたい揃える（圖 36）。これを水平に列置する。石と石の間には厚さを揃えた平石を丁寧に積み込む。こうして次第にできあがった層状の石の列のうえに再び同じように層をつくっていく。壁面は大石同志によって菱形紋様がつくられるから Diaper といい、壁面を強固にするために Rubble 積みを改良した外装の石積み形式である。この場合でも壁の内部は Rubble 積みである。Sirkap では亂石積の家壁でこわれたところを Diaper で補修し、あるいはまったくあらたにこのやり方で家が建った。またストゥーパにも用いられた。Block 1 E' のストゥーパがそれであることは前にふれた。要す



圖 35 亂石積 Rubble Masonry の例。Jandial D 遺跡



圖 36 菱形積 Diaper Masonry の例。Dharmarajika D 8 遺構

るに Sirkap 第Ⅱ層期において古くからつかわれてきた Rubble masonry が改良型の Diaper にその地位をゆずった。Sirkap はそのすぐあとに役割を終え、Taxila の中心は新建設の都市 Sirsukh に移る。Sirsukh の時代に Diaper は層と層との間に薄い割石層をいれるようになり、その層は次第に煉瓦のように一定した大きさ厚さの化粧切石を列べるようにかわっていき、Semi-ashlar 式へと発達する。Dharmarajika 大塔の西に残った Diaper 式の石積は、石積としてこういった位置にある。

Diaper 式石積の導入年代を、Allchin (1968, p. 19-23) は出土貨幣と都市 Sirkap の層位とをからめて検討している。それによると、ストゥーパが中央路に面して建ち並ぶ Sirkap 第Ⅱ層期は、Saka の Azes Ⅱ世の末年に建設され、Kushan の Kujula Kadphises と重複する時代である。この場合 Allchin は、Gondophares を Azes Ⅱ世と同時代のやや古い世代であって、Taxila とはほとんどかかわっていないとみている。この考えにたつと、Sirkap のあたらしい石積である Diaper は Kujula Kadphises 麾下の Kushan がこの地方にあらわれた時代である。この検討の結果を Dharmarajika 大塔にあててみると、伏鉢の建設は Kujula Kadphises 時代であり、それより古くにはならない。

伏鉢の内部構造である車輪状構造が圓形基壇のなかにまで至っていないことは、きわめて重要である。圓形基壇は、その外面が後補であるなしにかかわらず、車輪状構造よりも古い部分だという事実を示しているからである。この古い部分に對應する小建築が Dharmarajika 大塔の周圍に存在する(圖 12)。一定の幅の Pradkshinapatha をはさんで大塔周圍をみっちり取り圍んでいる小建築物である。いまみるそれは長い時代にわたって造立されたものであるから、それらの石積を丁寧に分類し、それに基づきつつ、各建築の伐り合い具合を観察して、造立順序を解いていくと、Diaper 式の石積の直前にどんな建築があったかがわかる。それは Kanjur 切石装のストゥーパである。これは内核を Rubble 式で積み、外装はやわらかい多孔質の Kanjur 石を方形に伐って組み合わせたストゥーパである(圖 37)。

そういった小建築はだいたい小さいストゥーパであり、舍利室がつくられている。おおくは埋納物を欠損しているが、たまたま残ったもののうちで、貨幣が発見されることはなおのことすくない。しかし貨幣があった場合はきわめて特徴がある。すなわち Maues 貨と Azes Ⅰ世貨が共伴するか(Stupa S8)、あるいは Azes Ⅰ世貨だけを納めている(Stupa R4)。Kanjur 切石外装の小ストゥーパである T12 では Kujula Kadphises 貨、Stupa No. 4 では Augustus Caesar 銀貨を容れていた。これはローマ初代皇帝にして皇帝廟建設者の Augustus である。いっぽう Dharmarajika とおなじ Kanjur 切石装のストゥーパは Sirkap 第Ⅱ層期市街にもあり、Block 1G のストゥーパでは Azes Ⅱ世貨を8枚も埋納している。つまり、Sirkap と Dharmarajika とを通じて、内部を Rubble、外装を



図 37 Kanjur 切石装の例。Sirkap 1F ストゥーバ

Kanjur とするストゥーバは、Azēs II 世貨と Kujula Kadphises 貨をこのんで納めた時代である。それより年代のあたらしい貨幣はなく、Kanjur 切石装ストゥーバは Kujula Kadphises と同時代か、あるいはそれよりあたらしい時代であり、決してそれ以前ではない。

これに對して、Kanjur 切石装ストゥーバの直後に現れる Diaper 式のストゥーバ、すなわち最初期に屬する Diaper 石積みストゥーバでは、Sirkap の Block 1D の stupa で 8 枚の Azēs II 貨、2 枚の Kujula Kadphises 貨、2 枚の Kadphes 貨がいっしょに埋納され、Dharmarajika の Stupa N7 が Azēs I 貨 1 枚、G7 が Azēs 紀元 136 年 (136-BC 58 = AD 78) 銘をもつ薄い銀板を出土している。したがって埋納貨幣の觀點では、Azēs II から Kujula までが Kanjur 切石外装と初期diaper 式との兩形式の混在の時代であり、Diaper 装ストゥーバはおそらく Kujula Kadphises から Vima 時代にかけて優勢になっていった。

Dharmarajika 大塔が補修されたとき車輪狀構造が伏鉢にとりいれられた。車輪狀構造は、Marshall がいうとおり、Sirkap 第Ⅱ期層とおなじ型式の Rubble masonry でつくられ、伏鉢の外壁は Diaper で築いた。そうして車輪狀構造が入り込まない、補修以前の基壇と Kanjur 切石外装の小ストゥーパとは同時代である。ストゥーパに埋納された貨幣の分布は、以上の建築物の前後関係にうまくそった分布であって、われわれは Diaper 式石積法の出現を Allchin 説より若干新しいものとみることになった。Dharmarajika の車輪狀構造の年代はほとんど Kujula Kadphises 時代か、やや降った時代である。Kujula について知られている年紀は 122-136 年に入る。これらは Azes 紀元であるから、AD 64-78 となり、ほぼ 1 世紀第Ⅲ四半世紀に Dharmarajika の車輪狀構造の年代を求めることができる。そうすると、これより本来の形式を理解していたとおもわれる、南東インドの車輪狀構造のストゥーパは、およそ 1 世紀前半だということになる。もちろん南東インドの車輪狀構造のストゥーパのなかには、Nagarjunakonda を除いてもなお、これより時代の降る例があるかもしれない。したがってこれこれが 1 世紀前半のストゥーパだといいきることはできない。導入年代については、幅廣くとらえるならば、インド使節が Augustus 帝に會った紀元前 26 年と紀元後の 1 世紀中葉までの高々百年にもみたくない間となる。このあまりにもせまい年代の枠は、かえって車輪狀構造の技術をインドにもたらしたのがほかでもない Augustus 帝に會見したインド使節自身であった可能性を高くする。

Augustus 靈廟の建築技術は、インドのストゥーパ建築にとってこの時代おおいに需要があったのである。ヨーロッパの例は墳墓建築であり、イタリアの本土と近縁である。ローマとはいかにも近い。しかし、インドは火葬だが、元來墳墓をつくらない。一方ストゥーパも原初は墳墓ではない (Irwin, 1979)。釋迦の骨灰を納めたものという意識が強まったとき、墳墓と認識されたであろう。この考え方がインドの宇宙觀のなかで出現したとすれば、それは多分に外來思想である。1 世紀のローマに火葬が流行したことは、先記 Suetonius によるまでもなく、考古學上まぎれもない事實である。車輪狀構造は單に建築技術の要請として輸入されたのであるが、14 年の死以降「神君」となったローマ皇帝、Divus Augustus の墓廟というものが、當時の世界の最大の建築であってみれば、インドにおいてはストゥーパに對して一大聖者の廟所という觀念を育成したことも考えられるであろう。この場合、車輪狀構造の出現に關してわれわれがこれまで採ってきた見方とはまったく異なった視點にすることになる。小規模ストゥーパでは既に成立していた丈高い圓形基壇を大規模ストゥーパで得る建設の方途を知らなかったという假説、これとは一線を畫する視點である。つまり、Augustus 靈廟という巨大な圓形建築が Augustus にあたえられた神性とあいまって、インド、とくに南東インドにおけるストゥーパの巨大化を促進したかもしれないということである。そうしてこのローマの大建築の圓形基壇が低平で

はなく、異常に高大であったことが、結果的にストゥーパのその高大化を招いたということにはなるうが。

最後に再び北西地方の車輪状構造についてのべる。Gandhara では輻壁は伏鉢につかわれ、また外輪壁はつかわれなかった。北西地方では車輪状構造を南東インドから受け取ったことは受け取ったが、本来の意味なんかをかんがえる必要がなかったのである。圓形基壇を高くしようという氣はまったくなかったからである。Taxila-Gandhara ではストゥーパの外形に関して、まったく異なった要素を採り込んだ。それが丈高い方形基壇である。方形基壇は單なる四角い箱形の壇ではない。壁面は壁柱で飾り、上部も基部も實際の建築、といっても邸宅とか會堂といった、世俗建築ではなく、とくに神殿建築の風を襲ったものであることは、別に示したことがある(桑山, 1990, p. 6 ff.)。それならどこからそんな神殿風の基壇などを得たかという、北西地方に近接した Bactria からではなく、これも帝政初期のローマの墓廟から受け取ったとかんがえねば解決しない(桑山, 1978, pp. 197-212)。ここでは方形基壇をもった帝政初期ローマの墓廟建築にその淵源があるとはっきりといえる。例は Via Appia にある Caecillia Metella 墓廟である。一邊 28.2 m の方形基台があり、その上に直徑 30 m の圓胴部がのる、1 世紀末ないしは 2 世紀初頭の墓廟である。San Vito 近くの Pozzuoli や Napoli 近くの Marano にある諸例は装飾のない箱形の基台ではなく、壁柱や軒蛇腹をきちんともっている。Pozzuoli 墓にはストゥッコ製の壁柱があり、それが pediments を支え、その上には軒蛇腹があつて、ストゥーパの基壇の仕様とまったく同じであつたし、Marano 墓ではもっと手のこんだこれら建築装飾が煉瓦でつくられていた(Toynbee, 1971, pp. 155-156)

1 世紀あるいはそれ以前のインドではどのストゥーパも基部から圓形の平面をもつものしかなかったから、Taxila-Gandhara では方形基壇を傳統に反して採用したことになる。新趣向のストゥーパは、Sirkap 第 II 層期にはじめてあらわれる。Sirkap の Blocks 1 A, 1 F, 1 G のストゥーパと Dharmarajika の北區にある Stupa No. 4 は、そういった例の初期のものであり、Kanjur 切石装のストゥーパがそれなのである。壁柱をそれぞれの石に掘り出したのちに、それをドライメイソンリーで組み上げた。また基部には刳型を Kanjur で造りだし、軒蛇腹もそれらと對になっている。このような外装は最終的にストゥッコ仕上げをし、Marshall が發掘のとき觀察したように、赤、橙、黄色の彩色があつた。この三色彩色は上にあげたローマの墓廟の方形基壇にも認められる。

Andhra でも、Gandhara でもストゥーパを建築として一層もりあげるために、帝政初期(といってもそれはほとんど Julius-Claudius 朝時代)のローマから、新機軸の墓廟建築に範をとってその要素を積極的に輸入した。しかし、Andhra と Gandhara とのちがいは歴然としている。前者ではストゥーパに本来不可欠である圓形基壇を變えることなく、その高

さを高大化するという、傳統文化の域内で異文化を採り入れた。一方、Gandhara ではストゥーパとしてはまったく異様な方形基壇を採用することによって傳統をこわしつつ、あらたな建築文化の展開を促した。この場合きわめて興味深いのは、車輪狀構造が Andhra から Mathura や Chandigarh を通って Gandhara にいたり、そこで本義とちがった形ながら受け容れられたのに對し、方形基壇はインド各地へは逆流せず、ほかに出ていくことがなかった點である。ここに亞大陸北西地方、つまり『大唐西域記』卷2においてはインドの正境にあらざる曲俗の「北印度境」の風土が濃厚にあらわれている。車輪狀構造の觀點からみれば、文化は最初西から東へ、それから、正確には南東から北西へ、ざっとみれば東から西へ、と傳達された。

注

Ratnagiri は Mitra (1981) が發掘した Orissa のストゥーパである。車軸と放射壁をそなえている。年代ははやくて5世紀、あるいは8世紀まで下がることも考えられる。ストゥーパ全體は方形の古い遺構の上に築いてある。方形プランはほかよりもおくれて Orissa で出現するから、Mitra が放射壁を8世紀としたのは正しい。ストゥーパ周邊部はこわれていたので、外輪壁は發見されていない。放射壁はそれぞれ外に向かって若干開いた形になっていて、ここで取り扱った諸例の放射壁とは全然違う。またそれらが置かれたレベルもストゥーパの基壇ではなく、大分高い位置である。なぜこんなあたらしい時代に放射壁がつかわれたのか。あるいはこれこそ法輪象徵論者にもってこいの事例であるかもしれない。

表1 車輪状構造をもつ遺構とその細部要素

| | 直径 (m) | 轂 | 輪数 | 外輪幅 | 幅数 (内から外へ) |
|------------------------|-----------|----|-------|------|------------------------|
| 南東インド | | | | | |
| 1. Ghantaśala | 33.3 | ■ | 3 | 6.15 | (4 + 12) + 16 |
| 2. Peddaganjam, No. 2 | 11.65 | ? | 2 ? | 1.15 | 8 ? + 12 |
| 3. Alluru | 23 | ● | 1 | | 16 |
| 4. Adurru | 20.4 | ● | 2 | | 16 + 24 |
| 5 A. Kodavali | ? | 内實 | 2 | | ? |
| 5 B. Salihundam | ? | ? | 1 | | 8 |
| 6. Amaravati | 41.4 | ? | 1 + ? | 2.4 | ? |
| 7. Nagarjunakonda | | | | | |
| No. 1 | 27.3 | ● | 3 | | 8 + 16 + 16 |
| No. 6 | 15 | ● | 1 | | 8 |
| No. 21 | 15 | ● | 1 | | 8 |
| No. 5 | 14.7 | ● | 2 | | 8 + 12 |
| No. 9 | 12.5 | □ | 2 | | 8 + 16 |
| No. 3 | 10 | □ | 1 | | 8 |
| No. 30 | 8.4 | ● | 1 | | 6 |
| No. 32 A | 8.1 | ● | 1 | | 6 |
| No. 14 | 8.1 | ◎ | 1 | | 4 |
| No. 52 | 6.6 | ◎ | 1 | | 4 |
| No. 54 | 6.6 | ◎ | 1 | | 4 |
| No. 105 | 6.6 | ● | 1 | | 4 |
| No. 27 | 4.5 | × | 1 | | 4 |
| No. 108 | 4.5 | × | 1 | | 4 |
| 8. Ter | 26 | ? | 1 | | 8 |
| 北西地方 | | | | | |
| 9. Kankali Tila | 18.85 | × | 2 | | 8 + 8 |
| 10 A. Sanghol, No. 1 | 16.8 | ◎ | 3 | 1.07 | 12 + 24 + 32 |
| 10 B. Sanghol, No. 2 | 3.7 | ◎ | 1 | | 8 |
| 11. Tahkal Bala A | 31.5 | × | 2 | | 16 + 16 |
| 12. Dharmarajika | 34.5 | ● | 0 | | 16 |
| 13. Block 1 E', Sirkap | 12 × 10.8 | × | 1 | | 4 + 4 |
| 14. Shah-ji-ki Dheri | 56 - 72 | × | 0 | | 8 |
| 15. Fil Khana | 15.2 | × | 0 | | 8 |
| 帝政初期ローマ墓廟 | | | | | |
| 16. Augustus 霊廟 | 87 | ◎ | 5 | | 0 + 0 + (12) + 12 + 24 |
| 17. West Mersea 墓 | 19.5 | ◎ | 1 | | 6 |
| 18. Via Appia 墓 | 20 | ◎ | 1 | | 8 |
| 19. Via Tiburtina 墓 | ? | × | 1 | | 8 |

凡例 ×: 轂なし, ●: 内實の轂, ◎: 中空の轂, ■: 方形内實の轂, □: 方形中空の轂。

表2 法輪の輻の数

| | |
|-----------------|---|
| Amaravati | 28: 法輪柱 (Barrett, 1954: Pl. 28). 31: 法輪 (Barrett, 1954: Pl. 16). 63: 法輪柱 (Sivaramamurti, 1956: Pl. 63, 3). 64: — (Sivaramamurti, 1956: Pl. 20, 2). 81, 81: 佛足の法輪 (Barrett, 1954: Pl. 47). 無数: 法輪柱 (Barrett, 1954: Pl. 8, b). 無数: — (Barrett, 1954: Pl. 9, a, b). 無数: — (Barrett, 1954: Pl. 20). |
| Sanchi, Stupa 1 | 16: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 40). 20: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 22). 22: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 69, c). 25: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 26). 26: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 27). 28: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 37, a). 32: 車輪 (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 23). 34: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2: Pl. 41). 38: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940: Pl. 60). |
| Sanchi, Stupa 2 | 12: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 91, h). 16: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 91, g). 16: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 74, 1 c). 16: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 74, 3 a). 16: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 86, 66 b). |
| Sanchi, Stupa 3 | 17(?): (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 103, b). 20: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 101). 24: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 97, 24). 27: (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3: Pl. 103, e). |
| Mathura | 15: 台座の法輪 (Joshi, 1966: Pl. 9) |
| Sanghol | 22: 法輪 (Gupta, 1985: P. 76). |
| Gandhara | 8: 法輪柱 (Kurita, 1988, 2: Fig. 791). 10: 法輪 (Kurita, 1988, 2: Fig. 852). 11: アーチ内の法輪 (Kurita, 1988, 1: Fig. 299). 15: 佛足の法輪 (Kurita, 1988, 1: Fig. 283). 24: 佛足の法輪 (Kurita, 1988, 2: Fig. 783). 24, 24: — (Kurita, 1988, 2: Fig. 786). 35, 20: — (Kurita, 1988, 2: Fig. 784). 45, 42: — (Kurita, 1988, 2: Fig. 755). 57: — (Kurita, 1988, 2: Fig. 782). 7: 初轉の法輪 (Ackermann, 1975: Pl. H, 15). 9: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 276). 13: — (Ingholt, 1957, 75—Taxila). 13: — (Ingholt, 1957, 77—Peshawar). 16: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 280). 24: — (Kurita, 1988, 1: Fig. p 3—II). 4, 4, 4: 三寶 (Kurita, 1988, 1: Fig. 288). 6, 6, 6: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 295). 8, 9, 8: — (Kurita, 1988, 2: Fig. 769). 9, 9, 9: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 282). 10, 10, 10: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 277). 11, 11, 11: — (Faccenna, 1962: Pl. 230, a). 12, 12, 12: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 274). 12, 13, 11: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 285). 14, 14, 13: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 298). 14, 14, 14: — (Kurita, 1988, 1: Fig. p 3—III). 18(?), 18, 18: — (Faccenna, 1962: Pl. 119). 24, 24, 24: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 294). 9, 12, 9 + 10: 三寶と法輪 (Kurita, 1988, 1: Fig. 296). 11, 11, 13 + 14: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 291). 12, 13, 11 + 11: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 290). 12, 13, 13 + 15: — (Kurita, 1988, 1: Fig. 292). 11, 10, 8 + Lotus: 三寶と蓮華 (Kurita, 1988, 1: Fig. 293). 18, 18, 18 + Lotus: — (Ackermann, 1977: Pl. 24, a). |

插图目録

1. 車輪狀構造をもつストゥーパの分布（白ぬき三角は車輪狀構造をもたないストゥーパ）
2. Ghantaśala のストゥーパ平面立面圖（Rea, 1894, pl. 14）
3. Adurru のストゥーパ（IAR 1985-86, pl. 1）
4. Mackenzie による Amaravati 大塔平面圖（Burgess, 1970）
5. Nagarjunakonda の第1ストゥーパ平面圖（Gupta, 1985）
6. Nagarjunakonda の第9ストゥーパ（Sarkar, 1960, pl. 35）
7. Kankali Tila のストゥーパ平面圖（Smith, 1969, pl. 3）
8. Sanghol 第1ストゥーパ區平面圖（Gupta, 1985, p. 16）
9. Sanghol 第1ストゥーパ南西部の遺構（分厚い輪壁とその外側の輪壁：桑山 951506）
10. Sanghol 第2ストゥーパ（IAR, 1985-86 B, pl. 23）
11. Tahkal Bala のストゥーパ平面圖（Errington, 1987）
12. Dharmarajika 大塔とその周囲の建築群（Marshall, 1951, pl. 45）
13. Sirkap の Block 1 E' と 1 F にあるストゥーパ（Marshall, 1951, pl. 24）
14. Shah-ji-ki Dheri 大塔平面圖（Kuwayama, 1997）
15. Fil Khana ストゥーパ平面，見通し圖（Mizuno, 1967, plan 11）
16. Sanchi 第1ストゥーパ北門浮彫の法輪（Marshall/Foucher/Majumdar, 1949, pl. 26）
17. Amaravati 大塔出土の浮彫佛足の法輪（Knox, 1992, fig. 122）
18. Gandhara の初轉法輪圖の法輪（Pehsawar 博物館：Inghold, 1957, fig. 77）
19. Rathacakra 圖（Gelder, 1985, p. 311）
20. Vaiśali のストゥーパ（Sinha/Roy, 1969, fig. 4）
21. Pauni の Jagannatha Tekdi ストゥーパ（Deo/Joshi, 1972, fig. 3）
22. Bhattiprolu のストゥーパ（Rea, 1894, pl. 2）
23. Butkara I の大塔初期の平面（Faccenna, 1980, ii, pl. 1）
24. Amaravati 初期のストゥーパ（Barrett, 1956, pl. I, a）
25. Amaravati 大塔の Barrett による復原圖（Barrett, 1956, fig. 2）
26. Augustus 靈廟平面圖（Toynbee, 1971, fig. 14）
27. Augustus 靈廟の復原 5 例（Crema, 1959, fig. 264）
28. West Mersea 墓平面概念圖（Collingwood/Richmond, 1969, fig. 56 b）
29. 修復後の Sanchi 第1塔（Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, pl. 5）
30. Bharhut 大塔欄楯のストゥーパ圖（桑山 951110：The Indian Museum, Calcutta）
31. Bedsa 石窟のストゥーパ（桑山 20216）
32. Bhaja 石窟のストゥーパ（桑山 20512）
33. Kanheri 石窟のストゥーパ（桑山 20901）
34. Karla 石窟のストゥーパ（桑山 20303）
35. 亂石積 Rubble Masonry の例。Jandial D 遺跡（桑山 940412）
36. 菱形積 Diaper Masonry の例。Dharmarajika D 8 遺構（桑山 96014）
37. Kanjur 切石装の例。Sirkap 1 F ストゥーパ（桑山 940303）

- Ackerman, H. C. (1975) *Narrative Stone Reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert Museum in London*, Rome.
- Allchin, F. R. (1968) Archaeology and the Date of Kanishka: The Taxila Evidence. A. L. Basham ed., *Papers on the Date of Kanishka*, Leiden, pp. 4–34.
- Barrett, D. (1954) *Sculptures from Amaravati in the British Museum*. London.
- Barthoux, J. (1933) *Le fouilles de Hadḍa: 1. Stupas et sites, texte et dessins*. Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, 4, Paris.
- Begley, V. / R. D. de Puma (1991) *Roma and India: The Ancient Sea Trade*, Madison.
- Brunt, P. A. / J. M. Moore (1967) *Res Gestae Divi Augusti. The Achievements of the Divine Augustus*, Oxford.
- Burgess, J. (1970) *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayyapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882*. London, 1887, repr. Varanasi, 1970.
- Burgess, J. (1874) The Lanjadibba or Mound at Bhattiprol, Rapalli, Taluga. *The Indian Antiquary*, 3 (1874), p. 124.
- Bühler, G. (1894) The Bhattiprolu Inscriptions. *Epigraphia Indica*, 2, pp. 323–329.
- Casson, L. (1989) *The Periplus Maris Erythraei: Text with Introduction, Translation, and Commentary*, Princeton.
- Chandra, R. (1919–20) Some Unpublished Amaravati Inscriptions. *Epigraphia Indica*, 15, pp. 258–275.
- Cimino, R. M. (1994) *Ancient Rome and India*, New Delhi.
- Collingwood, R. G. / I. Richmond (1969) *The Archaeology of Roman Britain*, rev. ed., London.
- Crema, L. (1959) *La Architettura Romaa*, Torino.
- Deo, S. B. / J. P. Joshi (1972) *Pauni Excavation 1969–70*, Nagpur.
- Eisner, M. (1976) Zur Typologie der Mausoleen des Augustus und Hadrian. *Römische Mitteilungen*, 86, pp. 319–324.
- Eisner, M. (1986) *Zur Typologie der Grabbauten im Suburbium Roms*, Mainz.
- Errington, E. (1987) Tahkāl: The Nineteenth-Century Record of Two Lost Gandhāra Sites. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 50/2, pp. 301–324.
- Faccenna, D. / M. Taddei (1962) *Sculpture from the Sacred Area of Butkara I (Swat, W. Pakistan)*, 2, Rome.
- Faccenna, D. (1980) *Butkara I (Swat, Pakistan) 1956–1962*, 1, IsMEO Reports and Memoirs, iii–1, Rome.
- Foucher, A. (1905) *L'Art gréco-bouddhiques du Gandhāra*, 1, Paris.
- Fabrègues, C. (1987) The Indo-Parthian Beginnings of Gandharan Sculptures. *Bulletin of the Asia Institute*, n. s. 1, pp. 33–43.
- Fussman, G. (1974) Ruines de la vallée de Wardak. *Arts Asiatiques*, 30, pp. 65–95.
- Gelder, J. M. van, tr. (1985) *Mānava Śrautasūtra belonging to the Maitrāyaṇīsaṃhitā*. Delhi, 1963, repr. 1985.
- Gupta, S. P. ed. (1985) *Kushana Sculptures from Sanghol (1st–2nd Century AD): A Recent Discovery*, No. 1, New Delhi.
- Hargreaves, H. (1910–11) Excavations at Shah-ji-ki Dheri. *Archaeological Survey of India*,

- Annual Report 1910-11*, p. 25-32.
- Haslett, P. (1876) Report on Archaeological Explorations at Tahkāl near Peshāwar. *Punjab Government Gazette, Supplement*, 30th March 1876, pp. 238-39.
- Huntington, S. L. (1985) *The Art of Ancient India*, New York/Tokyo, 1985.
- IAR (1957-58) Excavation at Nagarjunakonda, District Guntur. *Indian Archaeology 1957-58: A Review*, pp. 5-9.
- IAR (1961-62) Stupa-Mound and Early Sculptures, Ter, District Osmanabad. *Indian Archaeology 1961-62: A Review*, p. 102.
- IAR (1967-68) Excavation at Ter, District Osmanabad. *Indian Archaeology 1967-68: A Review*, p. 35.
- IAR (1971-72) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1971-72: A Review*, pp. 39, 41.
- IAR (1972-73) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1972-73: A Review*, p. 28.
- IAR (1984-85) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1984-85: A Review*, pp. 62, 66.
- IAR (1985-86 A) Excavation at Adurru, District East Godavali. *Indian Archaeology 1985-6: A Review*, pp. 1-2.
- IAR (1985-86 B) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1985-86: A Review*, pp. 67-69.
- IAR (1989-90) Excavations at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1989-90: A Review*, pp. 88-94.
- Inghold, H. / I. Lyons (1957) *Gandharan Art in Pakistan*, New York.
- Irwin, J. (1979) The Stūpa and the Cosmic Axis: The Archaeological Evidence. M. Taddei, ed., *South Asian Archaeology 1977*, 2, Naples, pp. 799-845.
- Joshi, N. P. (1966) *Mathurta Sculptures: A Handbook to Appreciate Sculptures in the Archaeological Museum, Mathura*, Mathura.
- Knox, R. (1992) *Amaravati: Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*, London.
- Kottkamp, H. (1992) *Der Stupa als Repräsentation des buddhistischen Heilsweges, Untersuchungen zur Entstehung und Entwicklung architektonischer Symbolik*, Studien in Oriental Regions, 25, ed., W. Heissig/H. -J. Klimkeit, Wiesbaden.
- 國原吉之助 (1986) 『スエトニウス著 ローマ皇帝傳』(上), 岩波文庫 青 440-1.
- Kurita, I. (1988) *Gandharan Art: I. The Buddha's Life Story*, 2 vols., Tokyo.
- 桑山正進 (1974) タキシラ佛寺の伽藍構成. 『東方學報』京都 46, pp. 327-354.
- 桑山正進 (1978) ストゥーパ方形基台の由來. 『足利惇氏教授喜壽記念インド學オリент學論集』, 國書刊行會, pp. 197-212.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』, 京都大學人文科學研究所.
- Kuwayama, S. (1991) The Horizon of Begram III and Beyond: A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kāpiśī-Kābul-Ghazni Region. *East and West*, 41/1-4, pp. 75-120.
- 桑山正進 (1995) Shah-jī-ki Dheri 主塔の遷變. 『東方學報』京都 67, pp. 408-331.
- Kuwayama, S. (1997) *The Main Stūpa of Shāh-jī-ki Dheri: A Chronological Outlook*, Kyoto.
- Lüders, H. (1973) *A List of Brahmi Inscriptions from the Earliest Times to about AD 400 With the*

- Exception of Those of Asoka*. Calcutta, 1912, repr. Varanasi, 1973.
- Marshall, J. (1912-13) Excavations at Taxila. *Archaeological Survey of India, Annual Report for the years 1912-1913*, pp. 1-52.
- Marshall, J. (1951) *Taxila: An Illustrated Account of Archaeological Excavations*, 3 vols., Cambridge.
- Marshall, J. (1960) *A Guide to Taxila*, 4th ed., Cambridge.
- Marshall, J., A. Foucher & N. G. Majumdar (1940) *The Monuments of Sanchi*, 3 vols., Delhi.
- Mitra, D. (1971) *Buddhist Monuments*, Calcutta.
- Mitra, D. (1981) *Ratnagiri (1958-1961)*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, 69, 2 vols., New Delhi.
- Mizuno, S., ed. (1967) *Hazar Sum and Fil Khana: Cave Sites in Afghanistan Surveyed in 1962*, Kyoto.
- 森田慶一 譯注 (1969) 『ウィトルーウィウス建築書 Vitruvii de architectura』, 東海大學出版會.
- 村川堅太郎 譯注 (1946) 『エリュトウラー海案内記』, 生活社.
- Peppé W. C. (1898) The Piprahwa Stupa, Containing Relics of Buddha. *Journal of the Royal Asiatic Society* (1898), pp. 573-588.
- Rea, A. (1894) *South Indian Buddhist Antiquities: Including the Stupa of Bhattiprolu, Gudivada, and Ghantaśala and Other Ancient Sites in the Krishna District, Madras Presidency*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, 15, Madras.
- Sarkar, H. D. (1960) Some Aspects of the Buddhist Monuments at Nagarjunakonda. *Ancient India: Bulletin of the Archaeological Survey of India*, 16, pp. 65-84.
- Sarkar, H. D. (1966) *Studies in Early Buddhist Architecture of India*, New Delhi.
- Satya Prakash/P. R. S. Sharma, eds. (1968) *Baudhāyana-Sūlbasūtram With Sanskrit Commentary by Dwarka Nath Yajvan, English Translation and Critical Notes by G. Thibout*. Research Institute of Ancient Scientific Studies, Dr Ratna Kumari Publications Series, 4, New Delhi.
- Schlumberger, D./M. Le Berre (1964) Observations sur les remparts de Bactres. *Monuments pré-islamiques d'Afghanistan*. Mémoires de la Délégation archéologiques française en Afghanistan, 19, Paris.
- Sinha, B. P./Sita Ram Roy (1969) *Vaiśali Excavations 1958-1962*. Patna and Allahabad.
- Sircar, D. C. (1965) *Select Inscriptions*, 1, 2nd ed., Calcutta.
- Sircar, D. C. (1963-64) Fragmentary Pillar Inscription from Amaravati. *Epigraphia Indica*, 35, pp. 40-43.
- Sivaramamurti, C. (1956) *Amaravati Sculptures in the Madras Government Museum*, Madras.
- Smith, V. A. (1969) *The Jain Stupa and Other Antiquities of Mathura*. Delhi, 1901, repr. Varanasi, 1969.
- Snodgrass, A. (1988) *The Symbolism of the Stupa*, Ithaca.
- Spooner, D. B. (1908-9) Excavations at Shah-ji-ki Dheri. *Archaeological Survey of India, Annual Report 1908-9*, pp. 38-59.
- Toynbee, J. M. C. (1971) *Death and Burial in the Roman World*, London.
- Tucci, G. (1971) Arrianus and Pāṭaliputra, Animadversiones Indicae. *Opera Minora*, 1, Roma, pp. 233-236.
- Virgili, P. (1984) A Proposito del Mausoleo di Augusto, Baldassarre Peruzzi aveva ragione.

- Archeologia Laziale*, 6. *Sesto incontro di studio del Comitato per l'archeologia laziale*, Roma, pp. 209 – 212.
- Vogel, J. Ph. (1929 – 30) Prakrit Inscriptions from a Buddhist Site at Nagarjunakonda. *Epigraphia Indica*, 20, pp. 1 – 37.
- Vogel, J. Ph. (1947 – 48) Prakrit Inscriptions from Ghantaśala, *Epigraphia Indica*, 27, pp. 1 – 4.
- Warmington, E. H. (1974) *The Commerce between the Roman Empire and India*, 2nd ed., London and New York.
- Wheeler, R. E. M. (1954) *Rome beyond the Imperial Frontiers*, London, 1954.